松浦市文化財調査報告書　第17集

田口高野遺跡

国営農地再編整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

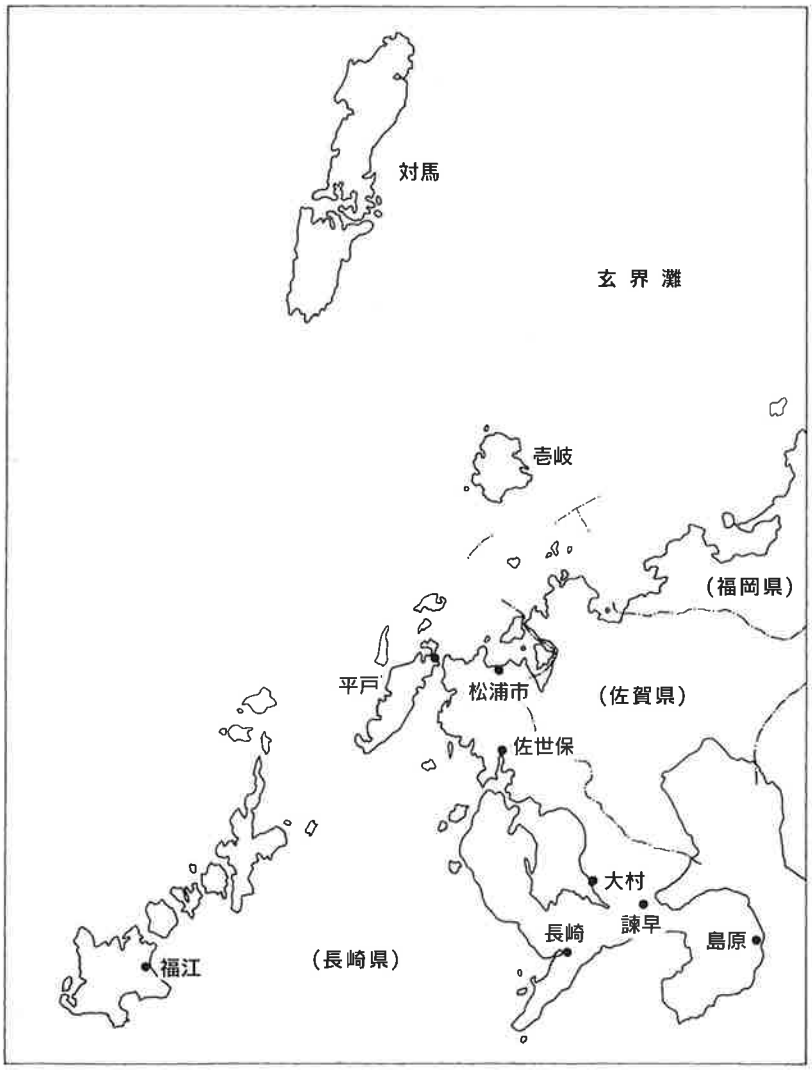
2001

長崎県松浦市教育委員会

松浦市文化財調査報告書　第17集

田口高野遺跡

国営農地再編整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



2001

長崎県松浦市教育委員会

Ｂ２区北壁土層

調査風景

見学風景

発刊にあたって

松浦市は、長崎県北部に位置しており、中国大陸・朝鮮半島に近いという地理的条件を有しているため、旧石器時代から中世期にかけての文化財が数多く存在しております。

本市は、人と未来を創造するみどりあふれる国際港湾都市づくりを目指し、自然環境の保護を念頭において地域開発を進めております。しかし、近年、本市においても各地で各種の開発事業が相次いで行われており、埋蔵文化財の保存が問題となっております。松浦市教育委員会では、このような状況を踏まえたうえで、やむを得ず保存できない埋蔵文化財については、事前に発掘調査を行い正確な記録保存に努め、また、後世に伝えていくことも文化財行政の重要な課題と痛感いたしております。

今回の調査は、九州農政局北松農地整備事業所による国営農地再編整備事業西木場工区に伴うものです。田口高野遺跡は、平成８年度の確認調査で後期旧石器時代の良好な遺物包含層を発見しました。そのため、遺跡の保護と事業の調整について協議をし、どうしても設計変更ができない部分を記録保存するための発掘調査を行いました。調査の結果、旧石器時代から縄文時代の遺物や遺構を発見することができました。

今回の調査に際しましては、関係者のご理解と多くの方のご参加を得て実施することができました。特にご協力をいただいた土地所有者の方々に対しまして、心より深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、本書が文化財に対するご理解と認識を深め、文化財保護に役立つことを祈念いたしまして発刊のご挨拶といたします。

平成13年３月30日

長崎県松浦市教育委員会

教育長　黒　川　壽　信

例　　言

1．本書は、国営農地再編整備事業に伴い松浦市教育委員会が平成11年度から平成12年度にかけて長崎県松浦市御厨町西木場免において実施した田口高野遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．調査及び本報告書作成にあたっては、九州農政局北松農地整備事業所・長崎県文化課・松浦市農林課・地元御厨地区の協力を賜った。
3．本書の編集は、中田・明石があたり、本書の執筆は、第Ⅰ・第Ⅲ・第Ⅴ章を中田敦之、第Ⅱ・第Ⅲ章を明石拡子があたった。第Ⅳ章は㈱古環境研究所による。
4．遺構の実測は中田・明石があたり、遺物の実測及び石器計測表は明石が行った。
5．遺構・遺物の製図は、中田・宮﨑朝美・吉野貴子があたった。
6．遺構･土層の写真撮影は中田・明石があたり、遺物の写真撮影は、明石があたった。
7．出土遺物は、松浦市教育委員会がその保管の任にあたり、松浦市生涯学習センター（松浦市志佐町浦免1483番地１）郷土資料室にて一括保管している。
8．写真図版の縮尺は、不統一である。
9．本書は、松浦市文化財調査報告書第１７集にあたる。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに ……1～2
　1．発掘調査に至る経過 ……1
　2．発掘調査関係者 ……2
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 ……3～12
　1．地理的環境 ……3
　2．歴史的環境 ……4
　3．確認調査 ……11
第Ⅲ章　遺跡の調査……13～32
　1．調査の概要 ……13
　2．層位 ……15
　3．遺構 ……25
　4．遺物 ……26
第Ⅳ章　科学分析……33～46
　Ⅰ．田口高野遺跡の土層とテフラ ……33
　Ⅱ．田口高野遺跡における植物珪酸体分析 ……40
第Ⅴ章　まとめ……47～48

挿　図　目　次

第１図　松浦市地質図 ……3
第２図　松浦市遺跡分布図 ……5～6
第３図　田口高野遺跡位置図 ……11
第４図　周辺位置図 ……12
第５図　確認調査区設定図 ……12
第６図　Ｔ２調査区遺物出土状況・土層図 …12
第７図　確認調査出土遺物 ……12
第８図　田口高野遺跡調査区設定図 ……14
第９図　調査区土層図 ……16
第10図　調査区土層図 ……17
第11図　調査区土層図 ……18
第12図　調査区土層図及び遺物垂直分布図 …19
第13図　調査区土層図及び遺物垂直分布図 …20
第14図　調査区土層図及び遺物垂直分布図 …21
第15図　調査区土層図及び遺物垂直分布図 …22
第16図　遺物分布図 ……23
第17図　遺物分布図 ……24
第18図　集石遺構実測図 ……25
第19図　出土遺物① ……27
第20図　出土遺物② ……28
第21図　出土遺物③ ……29
第22図　出土遺物④ ……30
第23図　出土遺物⑤ ……31

表　目　次

表１　松浦市遺跡一覧表 ……9～10
表２　田口高野遺跡出土石器計測表……32

図　版　目　次

図版１　調査風景 ……51
図版２　調査風景 ……51
図版３　Ａ１区北壁土層 ……52
図版４　Ａ５区東壁土層 ……52
図版５　Ｂ１区北壁土層 ……53
図版６　Ｂ１区西壁土層 ……53
図版７　Ｂ２区北壁土層 ……54
図版８　Ｂ２区西壁土層 ……54
図版９　Ｂ３区北壁土層 ……55
図版10　Ｂ３区西壁土層 ……55
図版11　Ｇ１区北壁土層 ……56
図版12　Ｇ１区東壁土層 ……56
図版13　Ｈ１区北壁土層 ……57
図版14　Ｈ１区東壁土層 ……57
図版15　集石遺構検出状況（東より）……58
図版16　Ｂ２区遺物出土状況（東より）……58
図版17　Ｇ１区遺物出土状況 ……59
図版18　Ｂ２区遺物出土状況 ……59
図版19　Ｂ２区遺物出土状況 ……60
図版20　大崎小学校６年生体験学習風景 ……60
図版21　出土遺物１(表) ……61
図版22　出土遺物１(裏) ……62
図版23　出土遺物２(表) ……63
図版24　出土遺物２(裏) ……64

第Ⅰ章　は　じ　め　に

１．発掘調査に至る経過

九州農政局北部九州土地改良調査管理事務所（以下「九州農政局」という。）では、土地利用の整序化を図り、農地用の効率的な土地利用と生産性の高い基盤を形成するため、既耕地を再編整備する区画整理497ha、及び隣接する未墾地等の開畑７haを一体化に施行し、高収益性作物の導入を行い、経営規模の拡大と中核農家の経営合理化を図るとともに兼業化、高齢化に対応するために集落営農を定着させることにより、農業の振興と地域活性化に資することを目的として、平成８年度から長崎県県北の松浦市、北松浦郡田平町、同江迎町、同鹿町町、同小佐々町、同佐々町、同吉井町の１市６町で面積610haの国営農地再編整備事業に取組むことになった。このため、松浦市教育委員会では長崎県教育委員会の協力を得て、九州農政局と埋蔵文化財についての協議に入った。協議の結果、まず松浦市内における国営農地再編整備事業予定地区内の遺跡の分布調査を、平成６年７月18日から７月20日に実施した。その分布調査の結果、確認調査が必要な遺跡として、牟田Ａ・牟田Ｂ・水尻Ｂ・蕨川・下谷・田口高野・大石Ｂ遺跡があった。周知の遺跡はないが、今福・調川・川内の３ヵ所において試掘調査が必要である旨を九州農政局へ回答した。協議の結果、平成７年度から３ヵ年計画で今後の協議に必要な基礎資料を得ることを目的に、確認調査及び試掘調査を行った。その調査費については、国庫補助・県費補助を受けて、松浦市教育委員会が主体となって実施することになった。なお、大石Ｂ遺跡については、地元との協議の中で事業計画地より除外されている。

平成８年４月には、九州農政局が北松浦郡吉井町に移転し、北松農地整備事業所（以下「事業所」という。）が開設され、以降の協議は事業所と行うことになった。

西木場工区の計画地15.0haの工事予定地区内には田口高野遺跡と下谷遺跡が周知されており、工事着手の前に確認調査を行う必要があるため、田口高野遺跡の確認調査を平成８年５月24日から６月４日までの期間行った。調査では事業計画地に４ヵ所の調査区を設定した。その結果、旧石器時代の遺物包含層が約600㎡に分布していることが予想された。この結果をもとに、事業所と協議をかさね、遺跡範囲のうち工事の計画変更ができない11号排水路と圃場面の削平される部分の調査を行うことになった。発掘調査費用については、平成11年４月１日付けで事業所長と松浦市長との間で田口高野遺跡埋蔵文化財発掘調査負担契約を締結し、発掘調査に向けての諸準備に取りかかった。

発掘調査は、工事計画の図面作成が遅れたため、平成12年３月１日から３月29日までの期間と11年度に実施できなかった部分約100㎡の調査を12年度に行った。なお、下谷遺跡については計画変更できない部分の発掘調査を平成12年度に行うことになった。

2．発掘調査関係者　（敬称略）

調査主体　松浦市教育委員会

調査総括　黒川壽信（教育長）

久家幸雄（教育次長）

事務局　川上啓一（生涯学習課課長　平成12年３月まで）

末竹信彦（生涯学習課課長　平成12年４月から）

庶務担当　和田光正（生涯学習課次長兼生涯学習係長）

田畑徹二（生涯学習課主事　平成12年３月まで）

松本龍一（生涯学習課主事　平成12年４月から）

調査担当　中田敦之（生涯学習課主査兼社会教育主事）

明石拡子（生涯学習課主事）

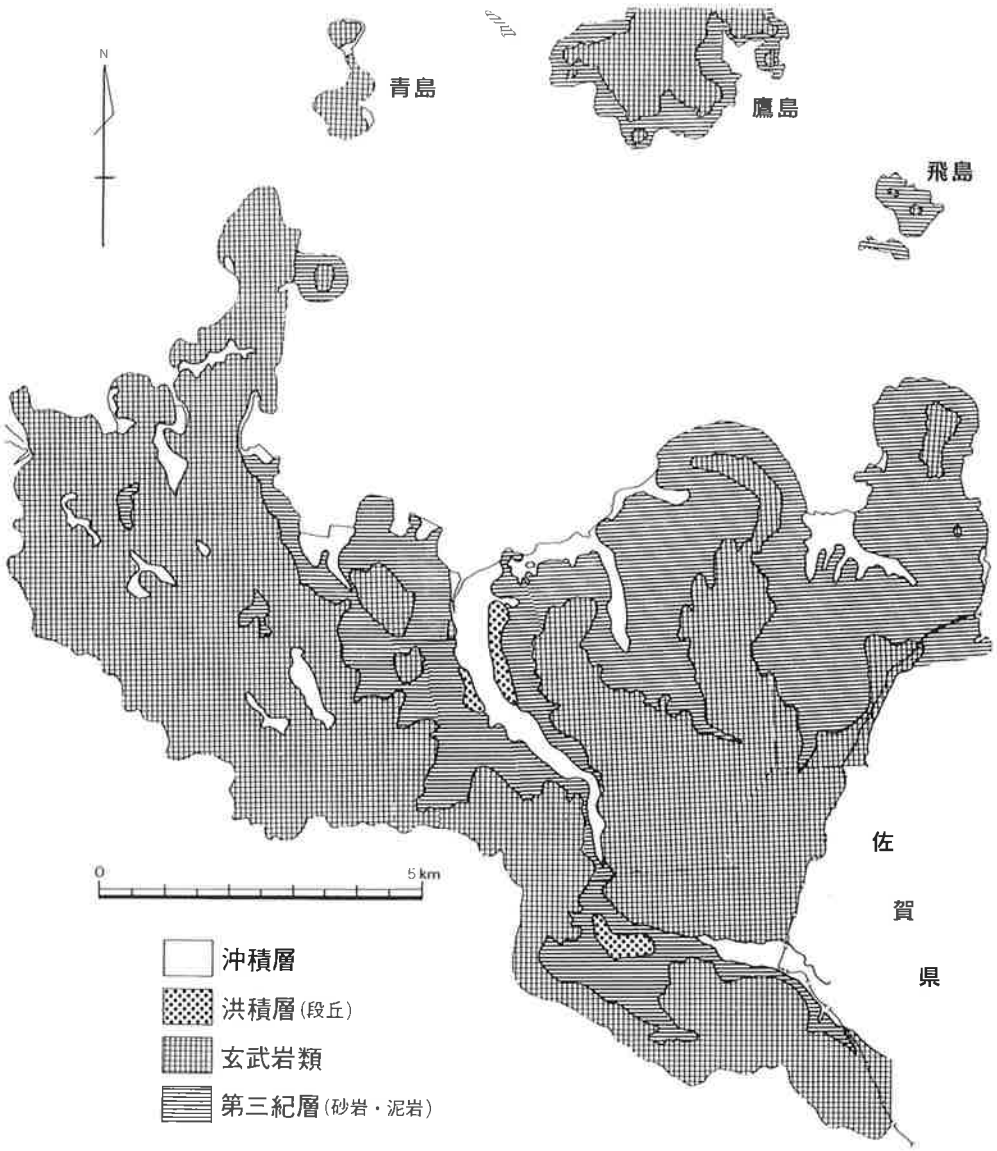
整理補助員　宮﨑朝美・吉野貴子

調査作業員　天久保正子・松永セツエ・松田マサヨ・冨野トシエ・里森知恵子・黒田ヒサエ・吉田末千子・今田英子・森　淑子・渡口米子・中島カズ子・白石チヨノ・徳田タマ子・関本朝子・山口民子・森　テル子・濱野富子・眞浦サチエ・芥川ムツエ・井上ハヤ子・吉永アヤカ・岩崎文子・末永民子・福本籾子・内野久美子・前田チヨノ・田中節子・岡村　実・勝村亀一・内野モモエ・作本富男・作本マサエ・大川カスミ・森山八重美・村田政子・辻元エン・松本綾子

第II章　遺跡の立地と環境

1．地理的環境（第１図）

長崎県本土の北端に位置する松浦市は、北松浦半島の北端部とその沖に浮かぶ青島・飛島などのいくつかの島々から構成されている。松浦市の北には伊万里湾と元寇の島で有名な北松浦郡鷹島町があり、西の北松浦郡田平町には西の登呂遺跡といわれる「里田原遺跡」がある。南の北松浦郡吉井町には縄文草創期の隆起線文土器が出土した「福井洞窟」がある。また、東は有田焼の積出港で有名な佐賀県伊万里市と接している。このように、松浦市の近郊は日本の歴史上においても重要な地域であり、中国大陸・朝鮮半島とも近いという地理条件からも、旧石器時代から中世期にかけての遺跡の宝庫でもある。



第１図　松浦市地質図

松浦市の地質は、第三紀層を基盤として、その上に玄武岩が広く堆積している地質構造を呈している。この玄武岩は、北松浦半島を中心に西九州に広く分布する松浦玄武岩（北松玄武岩）と称されるもので、典型的な溶岩台地を形成している。かつては、伊万里市南方を中心として噴出した火山であったと思われている。したがって、佐賀県境を占拠する標高777ｍの国見山を主峰とし、北および西に高度を減じている。この台地が形成されたのは八百万年以前の新第三紀の火山活動で、粘性の低い溶岩が楯状に広がった結果による。

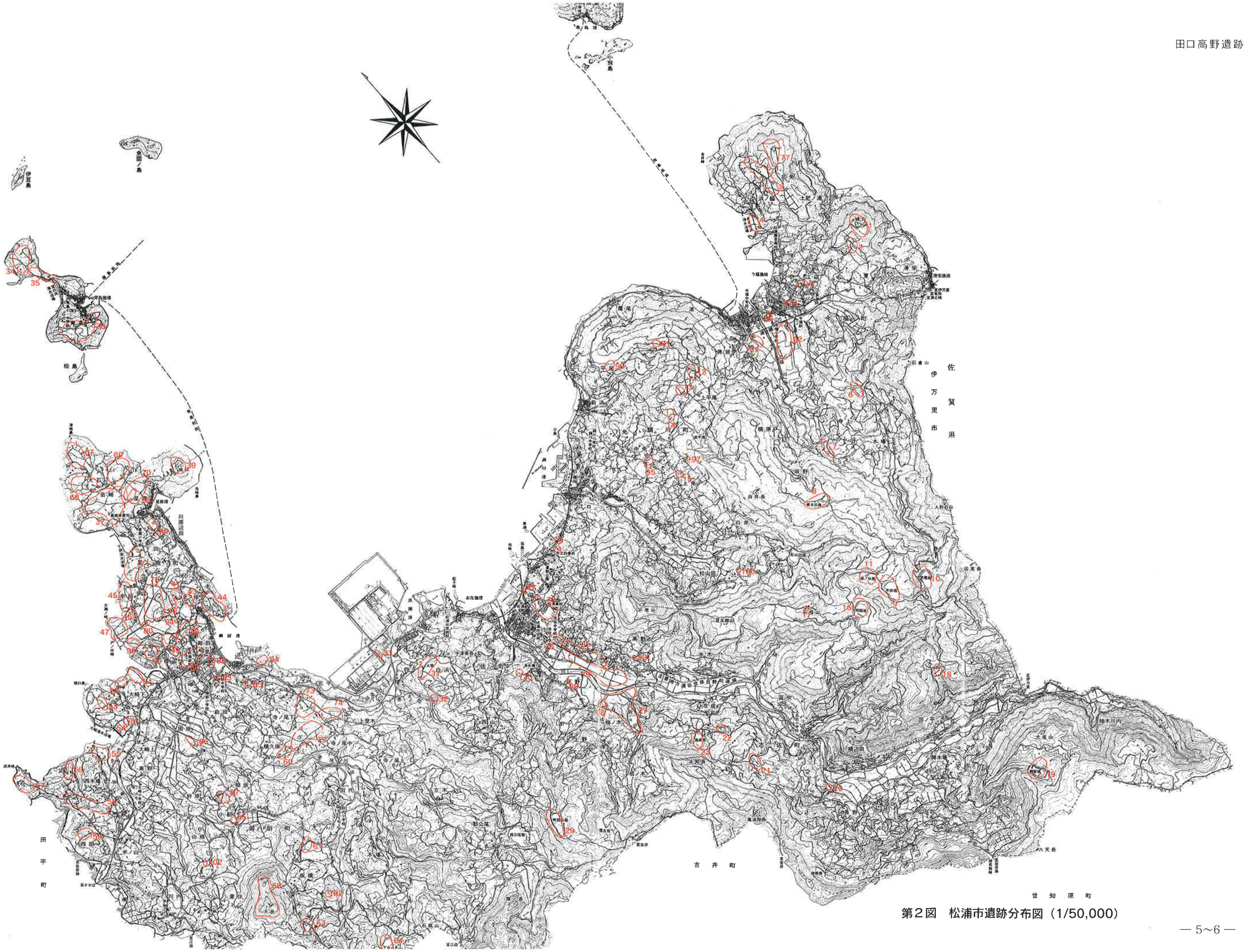
松浦市の地勢は、南高北低をなし、河川もすべて北流している。市の南側には400～500級の高位台地があり、悪太郎川以西では100ｍ以下の低位台地が広がっている。市西部の星鹿半島先端の津崎鼻や西田地区の波津崎には、長い年月の風化作用より海岸線を急峻に切り立たせた玄武岩の柱状節理の海食崖が発達している。この玄武岩が基盤になっているが、長い年月の侵食による地形の変化が著しく、現在の山頂部や山裾に溶岩流の一端を見ることができる。この玄武岩は節理の間に滞水しやすく、地辷り災害の原因にもなっているが、一面では湧水が豊富で溜池に利用されているところも多い。湧水のあるところは、古くより人と動物の暮らしに大きく係ってきている。

今回調査を行った田口高野遺跡がある市の西部一帯は、玄武岩が不整合に覆っていたる所に玄武岩台地を形成している。この台地は、竜尾川・加椎川・坂瀬川の浅い谷に刻まれた低位台地となっている。中央部を流れる竜尾川は、吉井・江迎町境の白岳山麓に源を発し、木場川・田代川などの支流を集めて、低位台地を刻んで北へ流れている。河口には三角洲がほとんどつくられず、ラッパ状に開いた三角江となっている。

２．歴史的環境

松浦市には、圧倒的に旧石器時代・縄文時代の遺跡が多い。特に田口高野遺跡の周辺は、市内でも遺跡の多い地域である。現在までに、旧石器時代の所産であるナイフ形石器や台形石器の資料が牟田Ｂ・楼楷田・田川遺跡などで確認されている。さらに、平成元年度の竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う寺ノ尾Ｃ遺跡の確認調査において、ナイフ形石器・台形石器の良好な包含層が検出されている。星鹿半島は、道具生産の主たる石材である黒曜石の原産地であるが、これまでの確認調査では良好な包含層の発見までには至っていない。

縄文時代では、姫神社・小嶋遺跡などがある。姫神社遺跡は、昭和41年にアメリカのウィスコンシン大学アルバート・モアと日本人学者（内藤芳篤・吉崎昌一）による合同調査が行われており、その一部が英文で報告されている。この論文については、福岡県教育委員会の水ノ江和同氏によって翻訳されている。同論文では、縄文前期の轟式土器・曽畑式土器を中心に、中期の阿高式土器、石器では石鏃・石錐・石槍・石斧・石匙などが報告されている。また、この姫神社遺跡からは萩原博文・久原巻二氏によって縄文後期の土器片とともに石銛・サイドブレイドが採集されている。小嶋遺跡は、昭和61年に簡易水道敷設工事に伴う緊急調査で発見した遺跡である。縄文前期の曽畑式土器、中期の阿高式土器を中心に一部他地区からの搬入土器もある。石器では石鏃・剥片鏃・石銛・滑石製装飾品・石斧などが出土している。平成６・７年には竜尾川地区県営圃場整備事業に伴い実施した田川遺跡の



第２図　松浦市遺跡分布図（1/50,000）

発掘調査では、縄文中期終末から後期初頭頃の坂の下式土器とともに多数の剥片鏃・つまみ形石器・石錐・石銛・サイドブレイド等が出土している。

弥生時代では、北久保Ｂ遺跡と姫神社遺跡で後期の壺・甕類が採集されている。大正14年に発見され、現在は長崎県の重要遺跡として周知されている池田遺跡がある。この遺跡は、昭和63年から平成元年にかけて４次にわたる確認調査が行われている。その結果、縄文晩期から弥生前期にかけての良好な包含層が検出されており、柱穴・箱式石棺墓・甕棺墓・土壙等の遺構と、西平式土器・刻目突帯文土器・板付Ⅱ式土器・骨製ヤス・貝輪等の遺物が出土している。その他では、平成２年の竜尾川地区県営圃場整備事業に伴う田原遺跡の調査で弥生後期を中心とする良好な包含層が検出されている。

古墳時代については、昭和62年に確認調査を実施した小嶋古墳群がある。３基を確認し、そのうちの１号墳を調査した。石室はすべて天井部を失って露出しており、方形の玄室プランに羨道を付した横穴式石室であった。玄室内より銀環・碧玉製勾玉・ガラス製丸玉などが多数出土しており、７世紀代に比定できる資料である。また、詳細は不明であるが、貴船神社古墳から提瓶１個と土師器が出土している。

古墳時代以降では、「宇野御厨」の痕跡であろう。宇野御厨荘、単に御厨荘ともいわれている。律令制下では天皇や神に貢献する魚貝・果物を贄と称しており、のちに宇野御厨が置かれた松浦・五島の地域でも、大宰府を通じて贄が貢上されていたことが『延喜式』や贄木簡などによって知られる。宇野御厨が初めて文書に現れるのは『東南院文書』で、寛治３年（1089）８月17日の筑前国観世音寺三綱解案に「宇野御厨別当下文」とあるものである。つぎに宇野御厨の名が見えるのは、『石志文書』の康和４年（1101）８月29日の肥前国宇野御厨検校源久譲状案である。この文書は偽文書の疑いがある。「宇野御厨検校散位」（源久）という松浦党の祖といわれる人物の名が見える。この源久は延久元年（1069）現在の松浦市今福町に下向し、土着したといわれている人物で、以後松浦党の諸氏は祖として仰いでいる。松浦党は、宇野御厨および御厨荘一帯に土着した源姓一字名の集団を中心に、当初はその姻族が加わった武士団であったと思われ、西北九州で絶大なる影響力を持つようになる。『河上神社文書』の正応５年（1292）の「肥前国河上宮造営用途支配懇田数注文」には「宇野御厨庄三百丁」と御厨の公田数が記されている。当時の御厨の範囲を確定することは難しいが、これらの資料から考えると、現在の五島列島・平戸島などの島々を含む県北地域一帯・南松浦郡の地域からと伊万里湾西側地域を含む一帯であろうと思われる。御厨の地名は鎌倉期から御厨荘などとして現れているが、これは宇野御厨を指し、現在の御厨には直接につながらない。しかし、鎌倉期に「御厨熊徳」なる人物名が見え、弘安４年(1281)に宇野御厨の預所から無主の荒野一町を給田として与えられており、すでに今日へつながる御厨の地名があったことが推測できる。御厨氏は「御厨氏系図」によれば、値嘉十郎連の子御厨小二郎並が始祖とされている。代々御厨を姓として、御厨城を居城とした。

南北朝期に入ると、松浦党はしばしば一揆を結んで地域支配の体制を強化している。『山代文書』の永徳４年（1384）の下松浦一族一揆契諾状には、「〈ミくりや〉三河守守」、「〈ミくりやのさかもと〉源宥」の当地を本拠とする土豪名が見える。

室町期に入ると、御厨氏は盛んに朝鮮貿易を行っている。『李朝実録』には「太宗恭定大王実録」戊子太宗８年（1408）６月庚辰条に「日本志佐殿・御厨殿、皆遣使献礼物」とあり、以後の『李朝実録』に「下松浦三栗野太守源満」「下松浦三河守融」などの名が見える。また、『海東諸国紀』にも「下松浦三栗野太守源満」の名が見える。

戦国期に入ると、田平里城主峰昌と弟の平戸松浦弘定との対立抗争があり、昌は島原の有馬貴純と結び、一方、弘定は大内義弘の援けを得て、延徳３年（1491）に平戸勝尾嶽城や箕坪城をめぐって激しい攻防を展開したが、結局大内氏の斡旋で和睦した。この結果、弘定の室の父である御厨資忠と子の善は御厨を追われ、川棚に走る。その後の御厨は平戸領となる。

参考文献・引用文献

松浦市史編纂委員会　『松浦市史』　1975

角川日本地名辞典編纂委員会　『角川日本地名辞典　42　長崎県』　角川書店　1987

長崎県史編纂委員会　『長崎県史』　―古代中世編―　1980

中田敦之　『田川遺跡』　松浦市文化財調査報告書第12集　松浦市教育委員会　1997

中田敦之　『松浦市内遺跡確認調査（2）』　松浦市文化財調査報告書第13集　松浦市教育委員会　1998

表１　松浦市遺跡一覧表

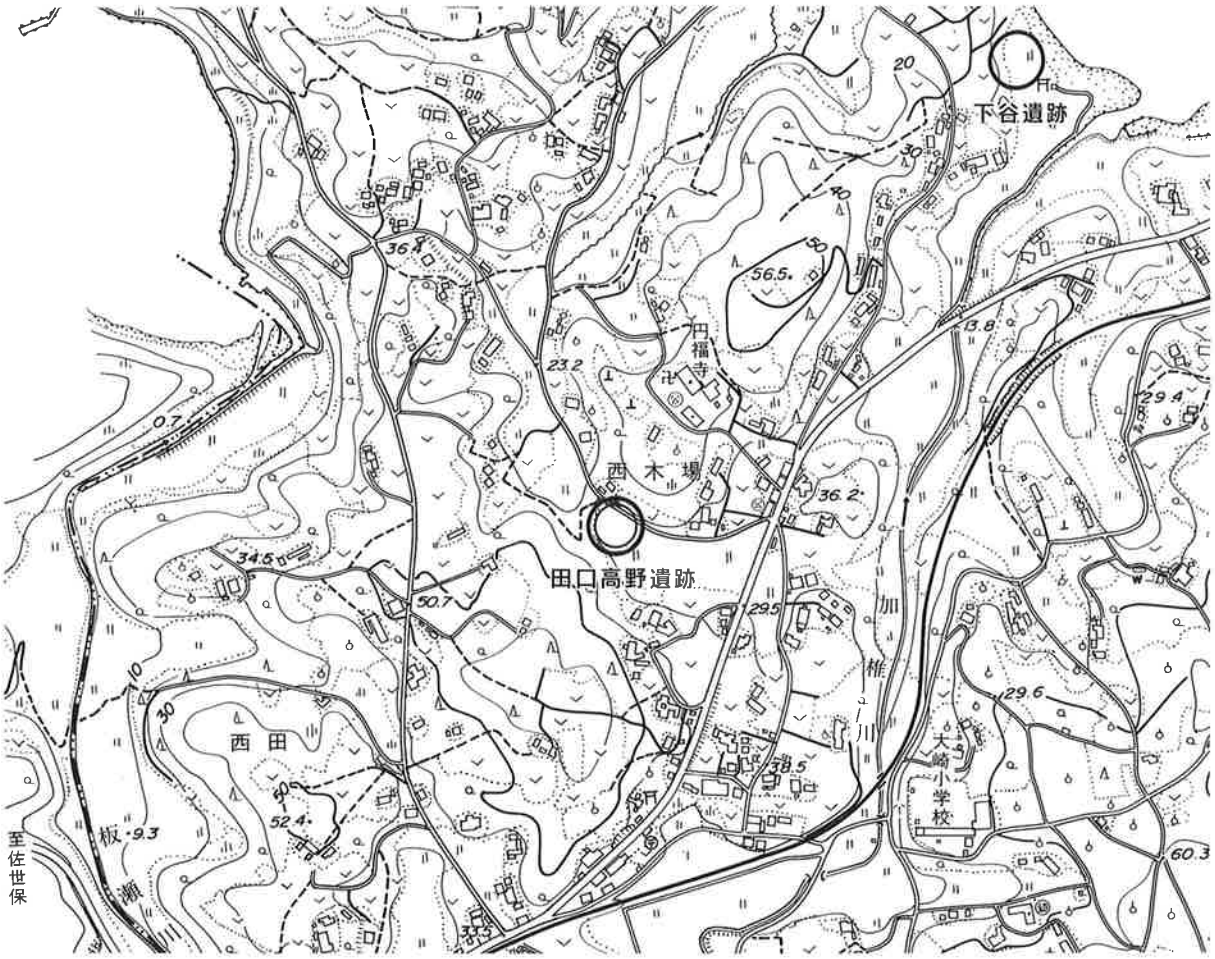
番号	遺跡名	所在地	出土遺物など	備考
1	松浦党梶谷城跡	今福町東免城山	輸入陶磁器、古唐津、銅銭、石鏃等	平成３～６年度確認調査
2	城山山麓遺跡	〃　東免農園	石鏃、剥片	
3	満場遺跡	〃　北免上満場・平ほか	ナイフ形石器、台形石器、掻器、剥片	昭和56年度確認調査
4	ぎぎが浜遺跡	〃　北免前田・黒崎ほか	須恵器	
5	山川遺跡	〃　東免山川	剥片	
6	長尾池遺跡	〃　木場免長尾・寺上免道山	石鏃、剥片	
7	深田代池遺跡	〃　寺上免方立・抜ケ	剥片	
8	椎ノ木谷遺跡	〃　坂野免椎木谷	台形石器、剥片	
9	牟田池遺跡	〃　木場免牟田	ナイフ形石器、石鏃、剥片	
10	葛籠池遺跡	〃　木場免札ノ辻・葛籠	石鏃、剥片	
11	湯ノ谷池遺跡	調川町松山田免湯谷	ナイフ形石器、石鏃、石核、剥片、押型文土器、並木式土器	
12	柳池遺跡	〃　平尾免柳・堀ノ元	ナイフ形石器、スクレイパー、剥片	
13	南久保遺跡	〃　平尾免雨久保	剥片	
14	櫨川遺跡	〃　平尾免古番所	剥片	
15	松園屋敷跡	〃　上免里		
16	川頭池遺跡	志佐町赤木免河頭・文明ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、磨製石斧、スクレイパー、剥片	
17	石盛山古墳	〃　赤木免石盛		
18	絶頂池遺跡	〃　田ノ平免小谷・谷	石鏃、剥片	
19	柳原池遺跡	〃　稗木場免仙須計	掻器、剥片	
20	黒岩岩陰遺跡	〃　横辺田免池ノ元	土器片	
21	モウデ池遺跡	〃　池成免庵ノ本	石鏃、剥片	
22	矢櫃池遺跡	〃　池成免池成	石鏃、剥片	
23	池成池遺跡	〃　池成免橋本・曽井	剥片	
24	寺田遺跡	〃　浦免寺田	スクレイパー、剥片	
25	久保園遺跡	〃　里免久保園、高野免松山ほか	石鏃、剥片、弥生土器、輸入陶磁器	平成７年度確認調査
26	陣ノ内城跡	〃　里免陣ノ内	石鏃、剥片、弥生土器、輸入陶磁器、石鍋、土師器	平成10年度確認調査
27	栢ノ木遺跡	〃　栢木免小久保ほか	青銅鏡片、管玉、ビーズ玉、石庖丁、弥生土器、輸入陶磁器、土師器、石鍋	第14次まで確認・本調査
28	堂山古墳	〃　栢木免高尾本		
29	明賀谷遺跡	〃　栢木免明賀谷	ナイフ形石器、台形石器、石斧、石匙	
30	大嶋遺跡	〃　庄野免小楠	経筒（滑石製、円筒形）	
31	大堤遺跡	〃　白浜免猿喰・山頭	剥片	
32	皿山窯跡	〃　白浜免京地	磁器、トチン、ハマ、ナンキン	昭和55年度本調査
33	楼楷田遺跡	〃　白浜免楼楷田・日前ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、掻器、石斧、須恵器、土師器、石鍋、輸入陶磁器	昭和57～59年度本調査
34	段ノ上遺跡	星鹿町青島免段ノ上	台形石器、須恵器、剥片、黒曜石原石	
35	一町田遺跡	〃　青島免崎田・中ノ島	弥生土器、須恵器、剥片	
36	青島遺跡	〃　青島免長久保・牛久保ほか	台形石器、ナイフ形石器、石鏃、剥片	
37	大石Ａ遺跡	〃　岳崎免追出・堤田ほか	黒曜石原石	
38	千人塚	〃　岳崎免大堂・丸久保ほか		
39	刈萱城跡	〃　岳崎免岳崎	ナイフ形石器、台形石器、剥片	平成元･3･6･11年度確認調査
40	下田遺跡	〃　下田免山口	ナイフ形石器、台形石器、凹石、彫器、土師器、黒曜石原石	昭和61年度確認調査
41	北久保Ａ遺跡	〃　北久保免勢ノ巣・藤園	石鏃、弥生土器、剥片、黒曜石原石	
42	北久保Ｂ遺跡	〃　北久保免浦頭	剥片、黒曜石原石	
43	北久保Ｃ遺跡	〃　北久保免浦頭	石鏃、剥片、黒曜石原石	
44	姫神社遺跡	〃　北久保免宮崎・玄道寺	ナイフ形石器、曽畑式土器、石斧、石鏃、石錐、弥生土器、須恵器、土師器、輸入陶磁器	昭和40年･平成4･7･8･10年度確認調査
45	牟田Ａ遺跡	〃　牟田免中尾	ナイフ形石器、石鏃、剥片、黒曜石原石	平成９年度確認調査
46	牟田池上遺跡	〃　牟田免池上	石核、石鏃、剥片、黒曜石原石	昭和58年度確認調査
47	佐世保崎遺跡	〃　牟田免佐世保崎	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、黒曜石原石	昭和57年度本調査
48	池田遺跡	御厨町池田免田崎・里免下長峯	夜臼式土器、弥生土器、石斧、石鏃、石匙、輸入陶磁器、獣骨、骨角器	昭和63･平成元･11年度確認調査
49	長蔵坊遺跡	〃　池田免長蔵坊・西ノ原ほか	ナイフ形石器、ラウンドスクレイパー、黒曜石原石	
50	中ノ崎遺跡	〃　池田免中ノ崎	ナイフ形石器、黒曜石原石	
51	水尻Ａ遺跡	〃　大崎免水尻・雀崎	黒曜石原石	

番号	遺跡名	所在地	出土遺物など	備考
52	水尻Ｂ遺跡	御厨町大崎免水尻ほか	ナイフ形石器、石斧、スクレイパー、剥片、黒曜石原石	平成８年度確認調査
53	蕨川遺跡	〃　大崎免俵場・フウチンほか	剥片、黒曜石原石	平成８年度確認調査
54	小嶋古墳群	〃　大崎免小嶋	銀環、勾玉、丸玉、鉄鏃、阿高式土器、石鋸、石銛、	昭和62年度確認調査
55	下谷遺跡	〃　西木場免下谷・平原	石鏃、剥片鏃、スクレイパー、阿高式土器、弥生土器、須恵器、土師器、輸入陶磁器	平成8年度確認調査・平成12年度本調査
56	田中遺跡	〃　西田免小田・田尻ほか	スクレイパー、剥片	
57	波津崎遺跡	〃　西田免波津崎	ナイフ形石器、剥片	
58	田口高野遺跡	〃　西田免田口高野ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、剥片	平成8年度確認調査・平成11・12年度本調査
59	西木場遺跡	〃　西田免潮入ほか	剥片	
60	横久保遺跡	〃　横久保免大久保	剥片、弥生土器	
61	田川遺跡	〃　田代免田川・前田	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、剥片鏃、つまみ形石器、石斧、阿高式土器、輸入陶磁器	平成６～７年度本調査
62	板橋経塚	〃　板橋免教塚		
63	板橋境目遺跡	〃　板橋免堺目・ケンケイ田	ナイフ形石器、石鏃、剥片	
64	アカニタ池遺跡	〃　板橋免アカニタ	ナイフ形石器、縄文土器、剥片	
65	葉山六地蔵	〃　小船免葉山		
66	坂本遺跡	〃　里免丸田・長峯	石鏃、黒曜石原石	平成11年度確認調査
67	津崎鼻遺跡	星鹿町岳崎免津崎ほか	ナイフ形石器、台形石器、彫器、掻器、石鏃、石刃、石刃核、黒曜石原石	
68	津崎遺跡	〃　岳崎免吸田・天堤ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、剥片	
69	大石Ｂ遺跡	〃　岳崎免園田・久保田ほか	細石核、石鏃	
70	大石Ｃ遺跡	〃　岳崎免堤田ほか	ナイフ形石器、石鏃、石核	
71	牟田Ｂ遺跡	〃　牟田免細・久保ほか	ナイフ形石器、石鏃、剥片、黒曜石原石	平成９年度確認調査
72	牟田Ｃ遺跡	〃　北久保免藤園・不動ほか	ナイフ形石器、台形石器、細石核、細石刃、掻器、石鏃、黒曜石原石	
73	寺ノ尾Ａ遺跡	御厨町上登木免大野谷	ナイフ形石器、台形石器、細石核、石核、石鏃、掻器、黒曜石原石	
74	寺ノ尾Ｂ遺跡	〃　上登木免野中田	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、掻器、石刃、石核	
75	寺ノ尾Ｃ遺跡	〃　横久保免天久保ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、石槍、掻器、細石核、弥生土器	平成元・4・6・10年度確認調査
76	辻ノ尾遺跡	志佐町浦免辻ノ尾ほか	細石核、細石刃、石鏃、剥片	昭和63年度確認調査
77	北平遺跡	今福町北免北平	石鏃、剥片	
78	文禄の役松浦家供養塔	〃　東免390番地	自然石板碑の供養塔、五輪塔、長明塔	
79	宮ノ下り遺跡	志佐町高野免宮ノ下りほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、石槍、弥生土器、土師器、須恵器、石錘、輸入陶磁器等	昭和60～63年度調査 平成11年度確認調査
80	北久保経塚	星鹿町北久保免竿	弥生土器、剥片	
81	小嶋遺跡	御厨町大崎免小嶋	阿高式土器、石斧、石鏃、石銛	昭和61年度確認調査
82	御厨城跡	〃　里免大久馬川		
83	御厨館跡	〃　里免館		
84	向山館跡	〃　里免坊ノ上		
85	中野遺跡	〃　中野免中野	ナイフ形石器、台形石器、彫刻刀形石器	
86	田原遺跡	〃　田原免田原ほか	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、石匙、弥生土器、須恵器、土師器、近世人骨	平成元年度確認・平成2年度本調査
87	城ノ越城跡	〃　小船免栗山		
88	大岳古墨	〃　板橋免大岳		
89	淀姫神社古墳	志佐町浦免宮前		
90	平尾遺跡	調川町平尾免芦原		
91	大塔遺跡	〃　平尾免大塔		
92	中ノ瀬遺跡	今福町浦免中ノ瀬・田川原ほか	石鏃、剥片、弥生土器、土師器、瓦器、輸入陶磁器	平成７年度確認調査
93	戸ノ本崎遺跡	星鹿町牟田免池上	ナイフ形石器、石斧、石鏃	
94	貴船神社古墳	〃　北久保免浦頭	須恵器、土師器	
95	古園遺跡	調川町下免古園		平成11年度確認調査
96	今福小学校遺跡	今福町浦免宮崎	剥片、弥生土器	
97	宮司の六地蔵塔	調川町上免宮司		
98	庄野の六地蔵塔	志佐町庄野免島田		
99	高野の六地蔵塔	〃　高野免堤田		
100	松山田の六地蔵塔	調川町松山田免平原		
101	今福遺跡	今福町仏坂免五百田ほか	石鏃、弥生土器、土師器等	平成7年度試掘・平成8年度本調査
102	小船遺跡	御厨町山根免広久保	ナイフ形石器、台形石器、石鏃、剥片、輸入陶磁器	平成8年度試掘・平成10年度本調査

３．確認調査（第３図～第７図）

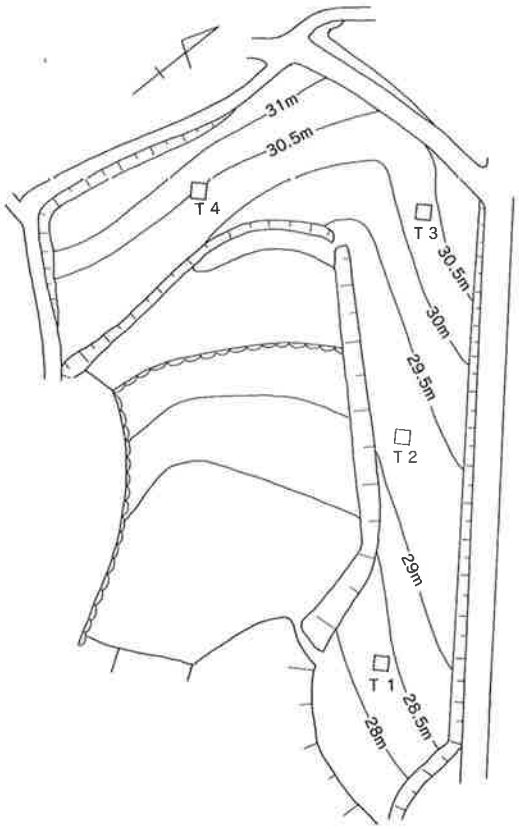
九州農政局が事業主体で、松浦市で国営農地再編整備事業が計画されている西木場工区は、市の西部御厨町西木場免に所在している。国道204号線沿いの西木場公民館より市道西木場線に隣接する丘陵上に位置し、北東の位置には下谷遺跡が立地している。遺跡の南から西には北松浦郡田平町との境をなす坂瀬川が流れている。

確認調査は平成８年５月24日から６月４日にかけて国庫補助・県費補助を受けて実施した。調査では、工事予定地の畑地に２ｍ×２ｍのトレンチを４ヵ所設定した。この調査の結果、Ｔ１・Ｔ３の調査区とも耕作土の下から約60㎝程が撹乱を受けていた。Ｔ２においてもＴ１・Ｔ３同様に約40㎝から60cm程度が撹乱を受けていた。本来この畑全体にあった遺物包含層の一部は、過去の造成によって撹乱を受けていると考えられる。しかし、Ｔ２においては、この撹乱層の下に褐色粘質土層があり、約20㎝から40㎝程度の後期旧石器時代の台形石器を主体とする良好な遺物包含層が確認された。Ｔ４でも約30㎝が撹乱を受けており、撹乱層の下の褐色粘質土層から少量ではあるが、安山岩製剥片などを検出した。出土遺物は、黒曜石製ナイフ形石器・台形石器・石鏃・剥片・砕片、安山岩製剥片、近世陶磁器など108点であった。遺構は検出されなかった。

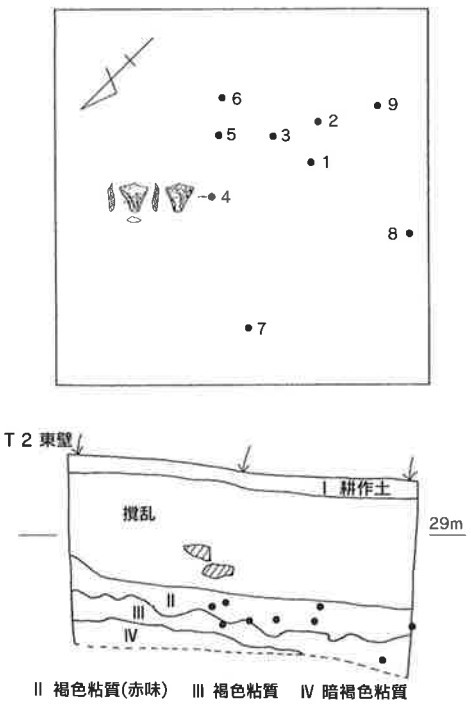


第３図　田口高野遺跡位置図（1/10000）

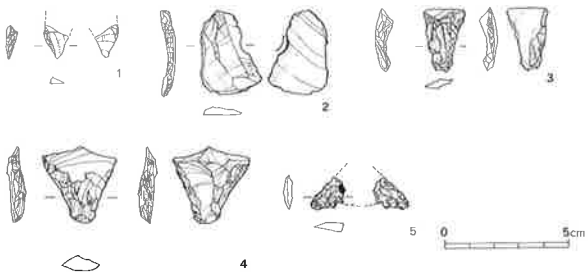
第４図　周辺位置図



第５図　確認調査区設定図（1/1000）



第６図　T2調査区遺物出土状況･土層図（1/40）



第７図　確認調査出土遺物（2/3）

第Ⅲ章　遺跡の調査

１．調査の概要

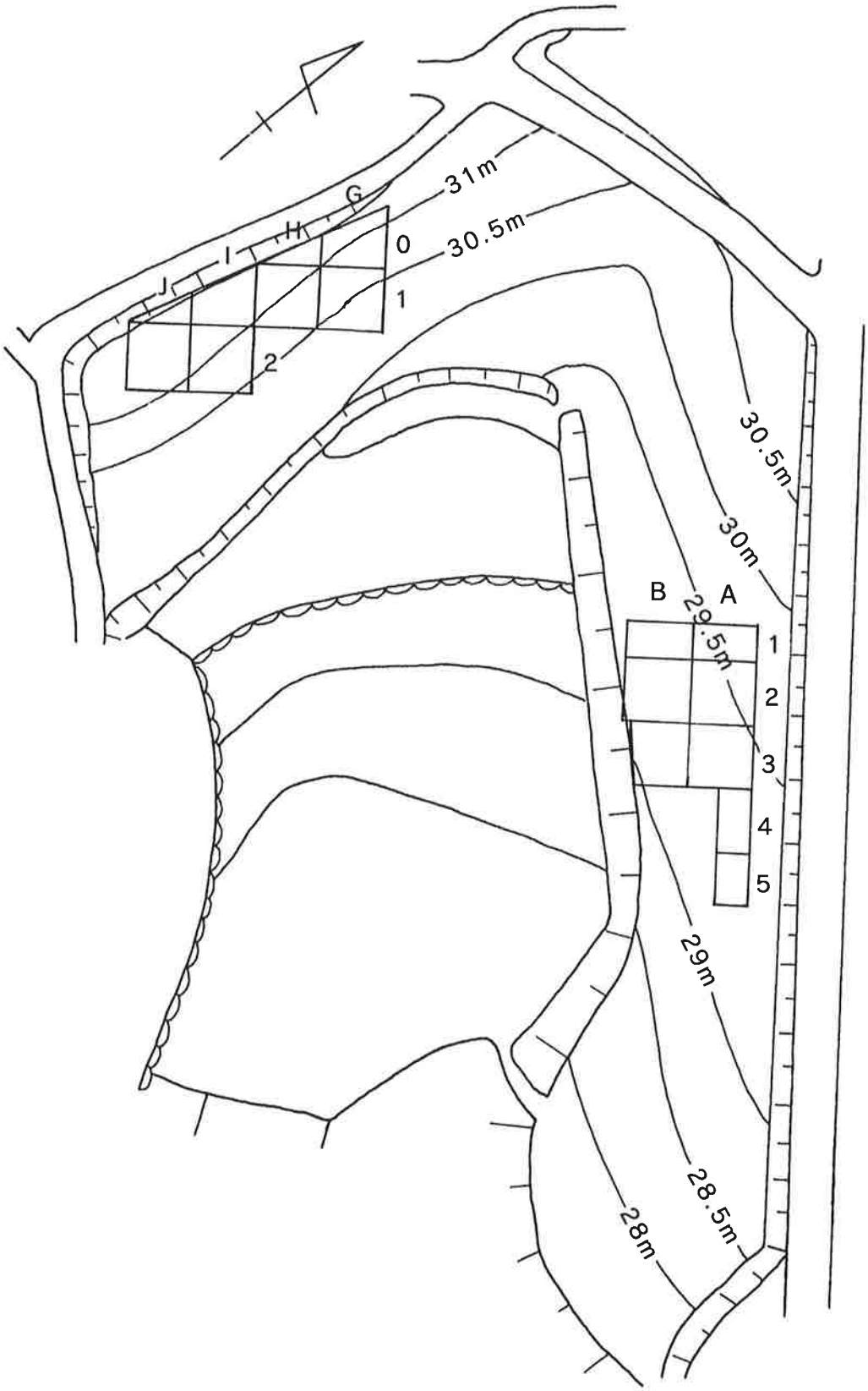
発掘調査は、簡易プレハブ、簡易トイレの設置が終了した平成12年３月１日から５月２日までの期間行った。作業の指導は調査員２名で行い、約30名の作業員を15名程のグループ２班に分割・組織した。最終日に近い４月25日には、地元の市立大崎小学校の６年生18名が授業の一環として、本調査の体験学習を行っている。

調査期間における記録措置として、土層堆積状況および遺構の検出状況の写真撮影・実測図の作成を行った。写真撮影は、35ミリ判モノクロフィルム及びカラーリバーサルフィルムを使用した。実測図については、土層図を１／20、遺構図を１／20と１／10に縮小して作成した。

調査区は水路を基準にして、トランシットを使用して調査の基本的なグリットを５ｍ×５ｍの25m^2で組んだ。グリット番号は東から西へＡ・Ｂ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊとし、北から南へＯ・１～４・５とした。なお、Ａ１・Ｂ１区については３ｍ×５ｍ、Ａ４区は５ｍ×2.5ｍ、Ａ５区は４ｍ×2.5ｍ、Ｂ３区は4.2ｍ×５ｍと設定した。ＧＯ・ＨＯ・Ｉ１・Ｊ２区については、ＧＯ区とＪ２区の杭を結び、ＧＯ・ＨＯ・Ｉ１・Ｊ２区の北壁を20ｍに設定した。

調査方法は、各グリットで層位に基づいて掘り下げ、無遺物層に至ると完掘とした。遺物取り上げについては、各グリットの同一土層内で出土した遺物を一括遺物とした。Ａ１～Ａ５区・Ｂ１～Ｂ３区のⅢ層～Ⅴ層出土、Ｇ１区・Ｈ１区・Ｉ１・Ｉ２区から出土した遺物については、平板測量でその位置を記録した。また、Ｂ２・Ｂ３区北壁では、自然科学分析（地質調査・火山ガラス比分析・屈折率測定）と植物珪酸体分析のための土壌サンプリングを行った。その結果については第Ⅳ章に記載した。

調査区の全体の掘り下げは人力により、調査終了後は直ちに工事が行われた。



第８図　田口高野遺跡調査区設定図（1/500）

2．層　位

今回の調査地点は、北から南に向かって緩やかに傾斜しており、この畑全体にあった遺物包含層の一部は、過去の造成によって地表から約0.6m程撹乱を受けていた。

Ａ１区は地表面から0.9～1.3m、Ａ２区は1.1～1.4m、Ａ３・Ａ４区は1.1m、Ａ５区は1.0～1.3mほど掘り下げた。Ａ１～Ａ５区はほぼ同じ土層の堆積状況が確認できた。

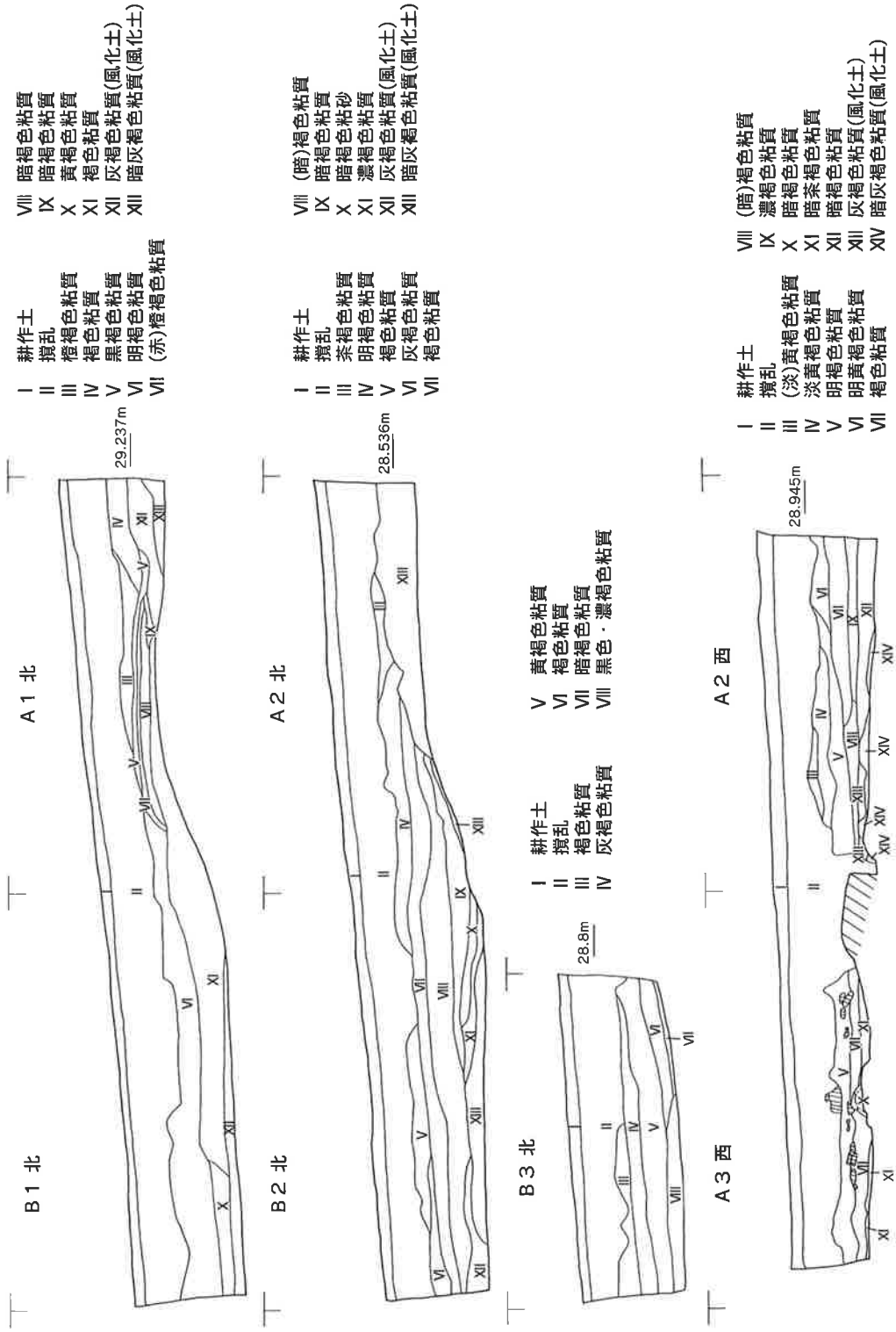
Ｂ１区は1.3m、Ｂ２区は1.5m、Ｂ３区は1.3mほど掘り下げた。Ｂ１～Ｂ３区はほぼ同じ土層の堆積状況が確認できた。Ⅰ層の耕作土の下からⅡ層（約0.6m）は撹乱を受けていた。Ⅲ層は赤みをおびた褐色粘質土層、Ⅳ層は灰褐色粘質土層、Ⅴ層の暗褐色粘質土層からは台形石器や黒曜石剥片・黒曜石砕片が多く出土している。Ⅵ層の黄褐色粘質土層、Ⅶ層の暗黄褐色粘質土層、Ⅷ層は黒褐色・灰褐色粘質土層で風化土層の盤となっている。

ＧＯ区は0.5～1.6m、Ｇ１区は1.8mほど掘り下げた。Ⅰ層は耕作土、Ⅱ層は褐色粘質土層、Ⅲ層は褐色粘質土層（Ⅱ層より赤みをおびている）、Ⅳ層は暗褐色粘質土層、Ⅴ層は灰褐色粘質土層、Ⅵ層は褐色粘質土層、Ⅶ層は（黄）褐色粘質土層、Ⅷ層の黄褐色粘質土層、Ⅸ層は暗黄灰色粘質土層、Ⅹ層は暗灰褐色粘質土層、Ⅺ層は濃黄褐色粘質土層、Ⅻ層は暗茶褐色粘質土層となっている。

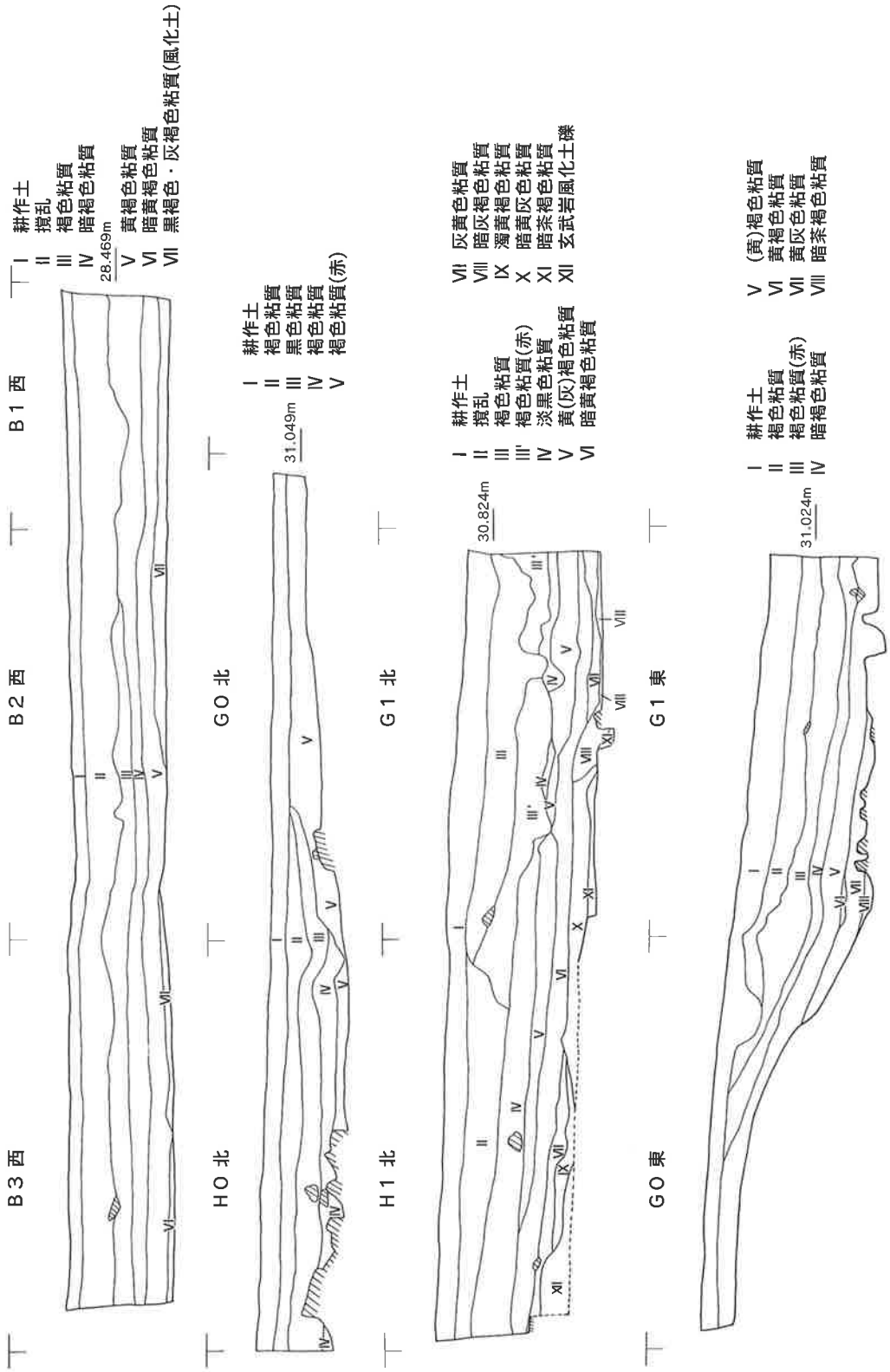
ＨＯ区は0.5～1.0m、Ｈ１区は1.6mほど掘り下げた。Ⅰ層は耕作土、Ⅱ層は（約0.5m）撹乱を受けていた。Ⅲ層は褐色粘質土層、Ⅲ´層は明褐色粘質土層、Ⅳ層の黒色粘質土層、Ⅴ層の暗黄褐色粘砂土層、Ⅴ'層の暗黄褐色砂質土層（Ⅴ層より砂質が強い）、Ⅵ層は淡黄褐色粘質土層（泥礫）、Ⅶ層は灰黄色粘質土層、Ⅷ層の濁黄褐色粘質土層、Ⅸ層の暗黄灰色粘質土層、Ⅹ層の玄武岩風化礫層となっている。

Ｉ１区は1.6m、Ｉ２区は1.0mほど掘り下げた。Ⅰ層は耕作土、Ⅱ層は褐色粘質土層、Ⅲ層は明褐色粘質土層、Ⅳ層は黒色粘質土層、Ⅴ層は暗褐色粘質土層、Ⅵ層は黄褐色粘質土層、Ⅶ層は濁黄色粘質土層、Ⅷ層は灰黄色粘質土層となっている。

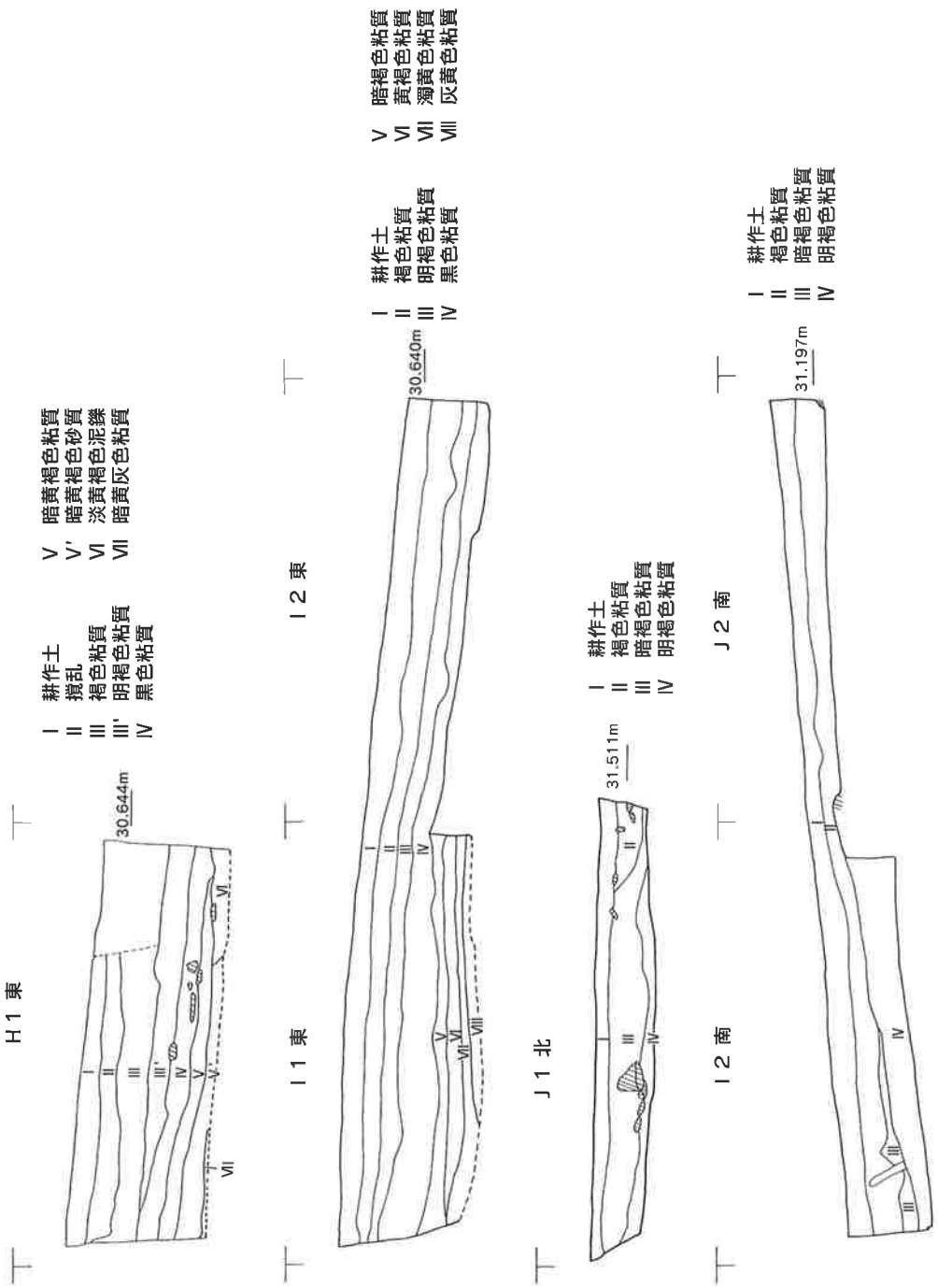
Ｊ１区は0.6m、Ｊ２区は0.5mほど掘り下げた。Ⅰ層は耕作土、Ⅱ層は褐色粘質土層、Ⅲ層は暗褐色粘質土層、Ⅳ層は明褐色粘質土層となっている。



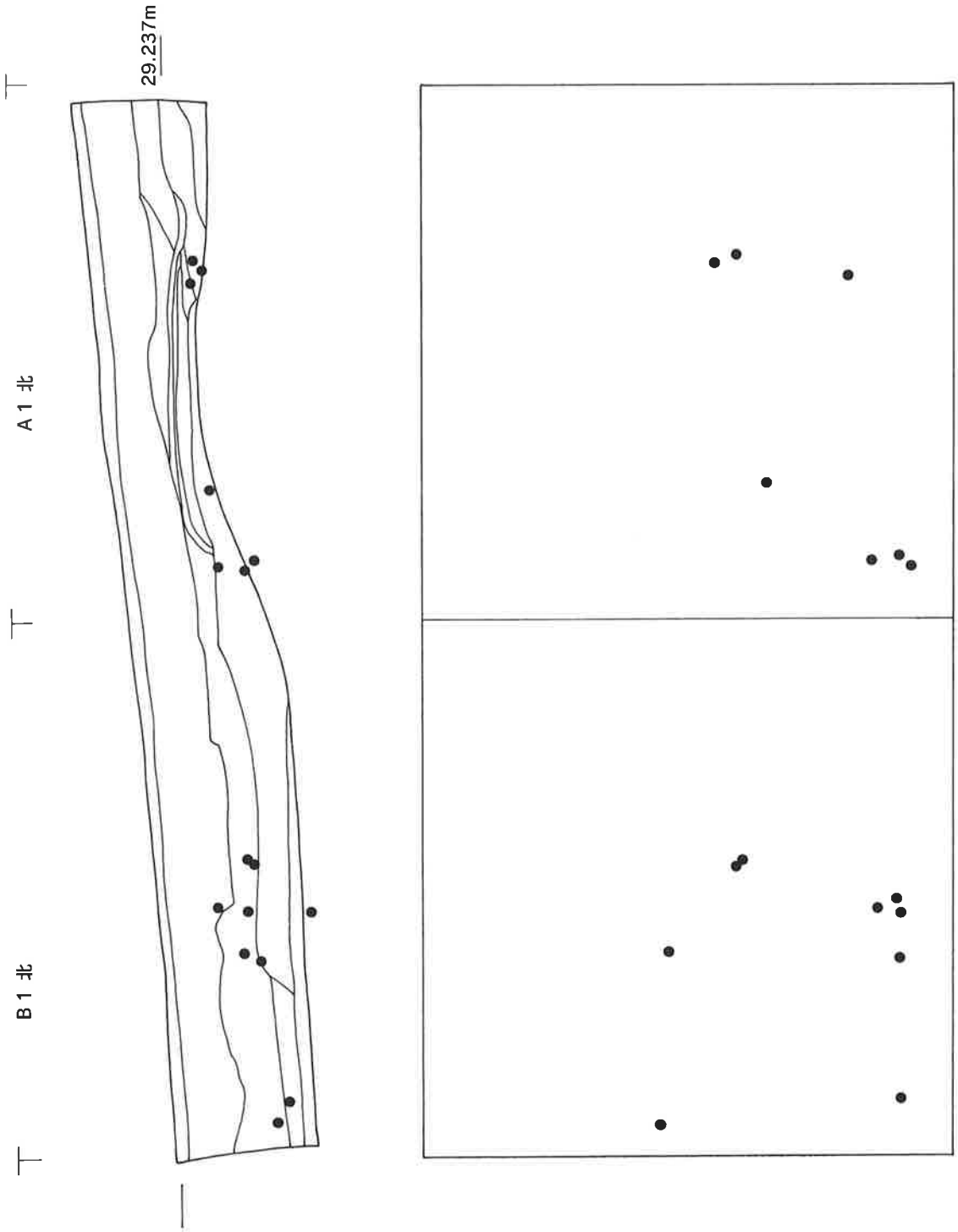
第9図　調査区土層図（1/80）



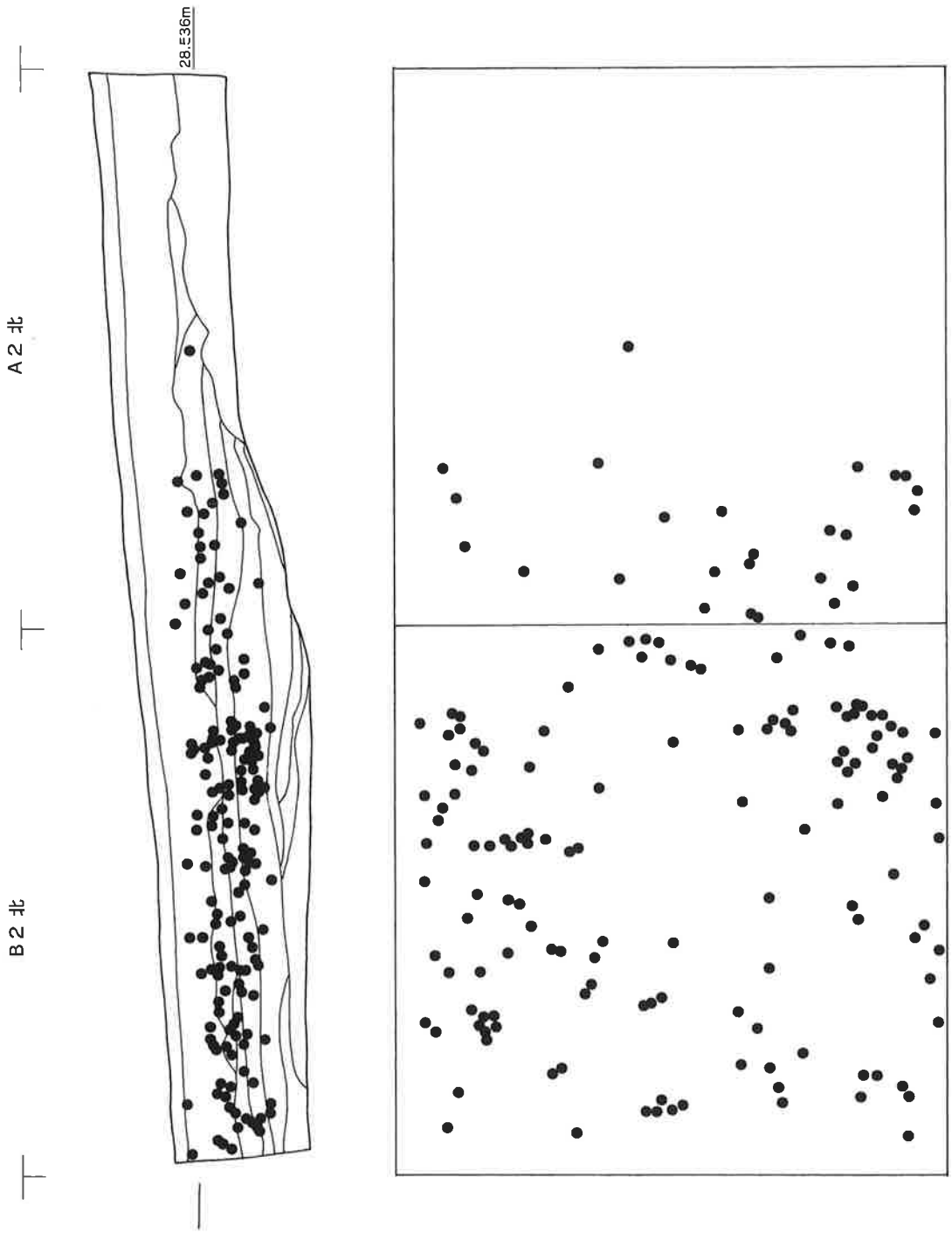
第10図　調査区土層図（1/80）



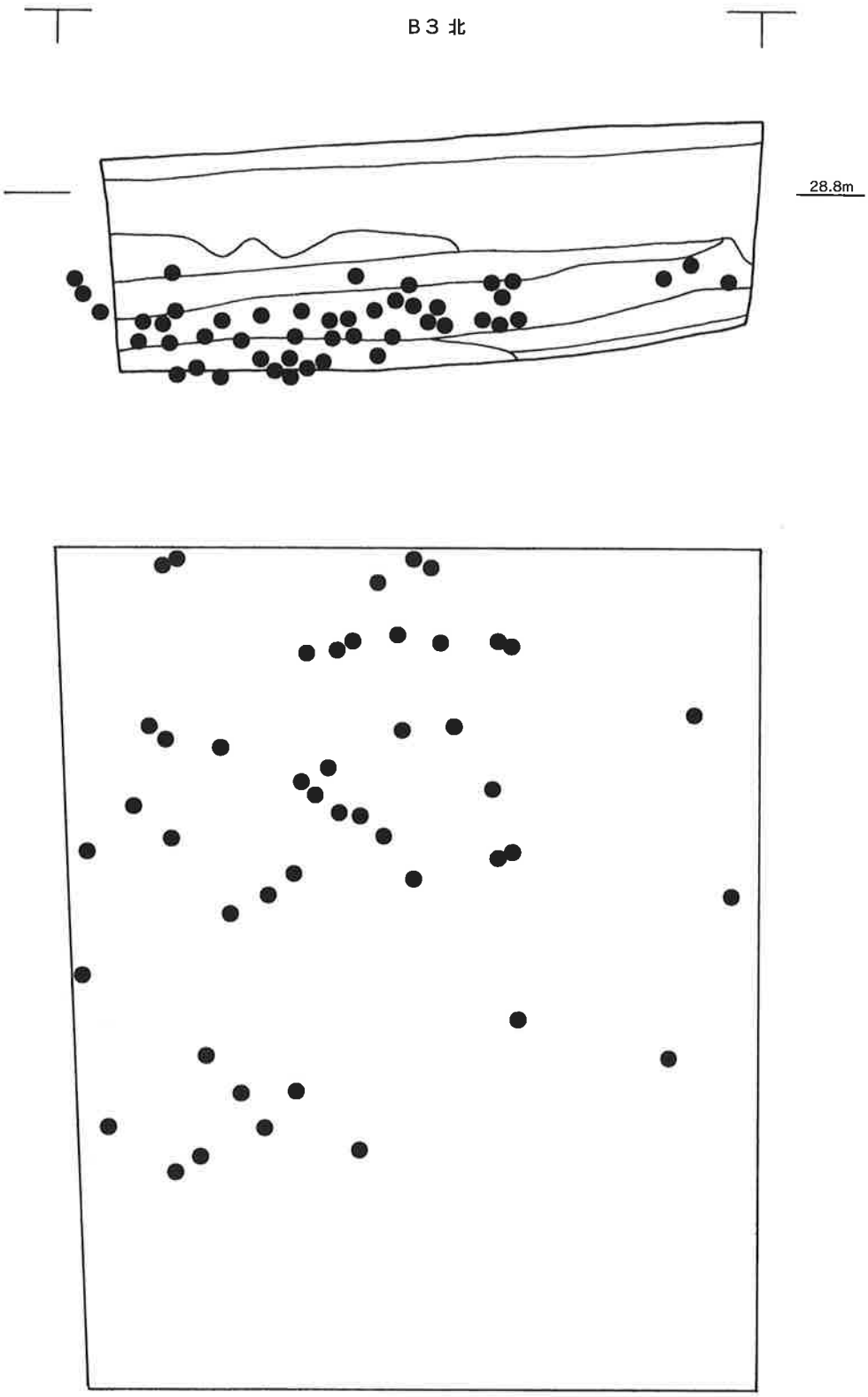
第11図　調査区土層図（1/80）



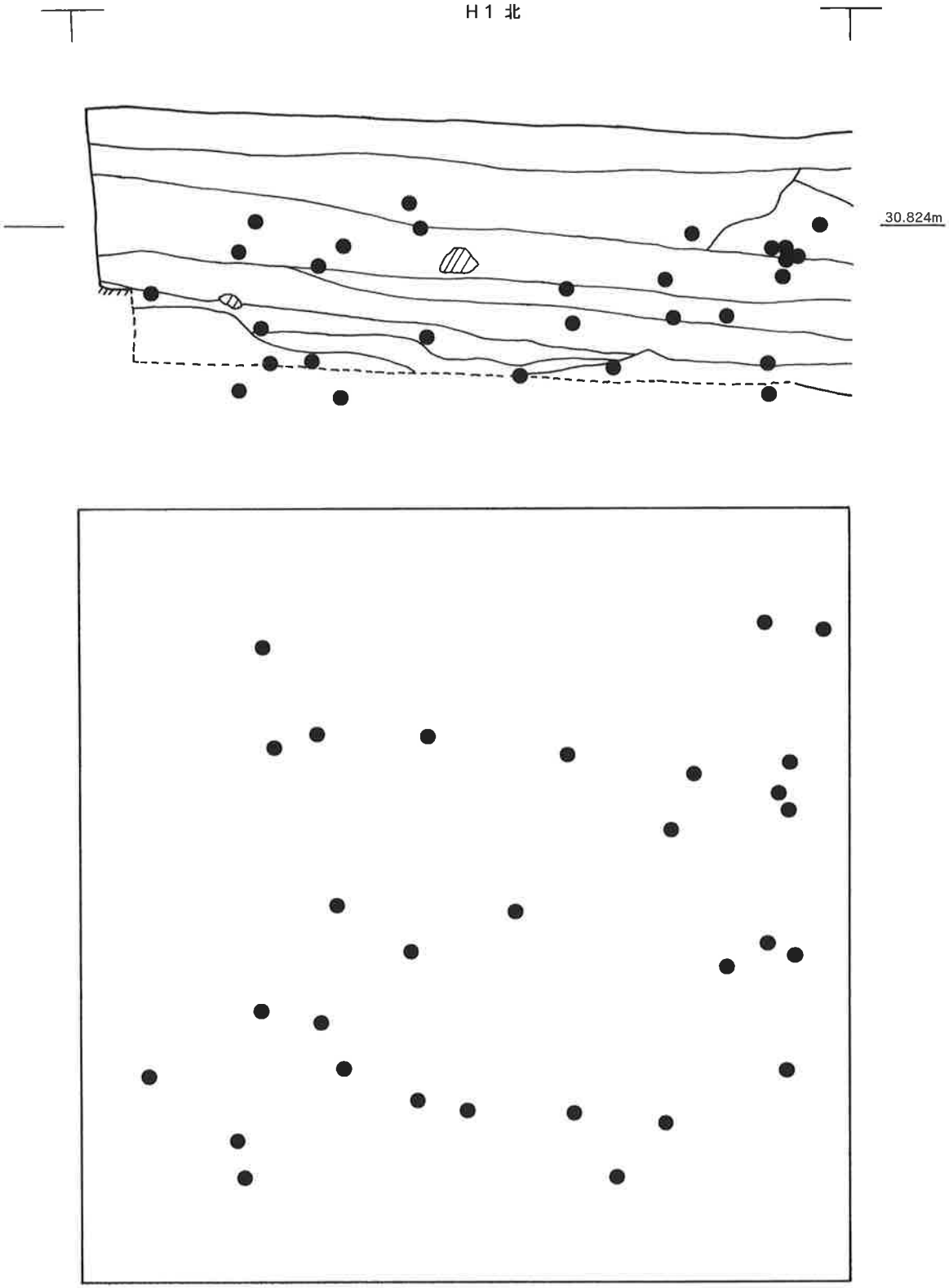
第12図　調査区土層図及び遺物垂直分布図



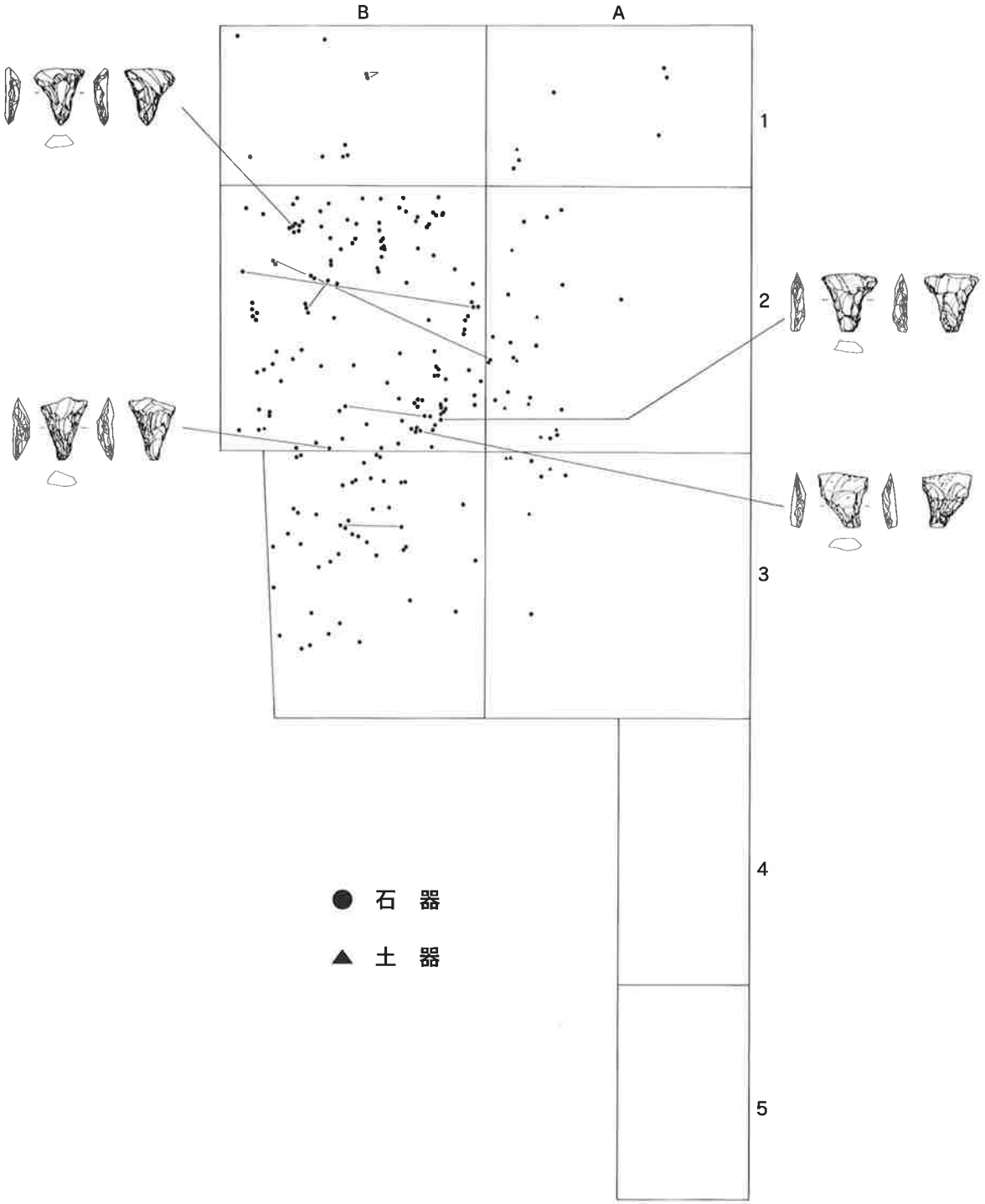
第13図　調査区土層図及び遺物垂直分布図



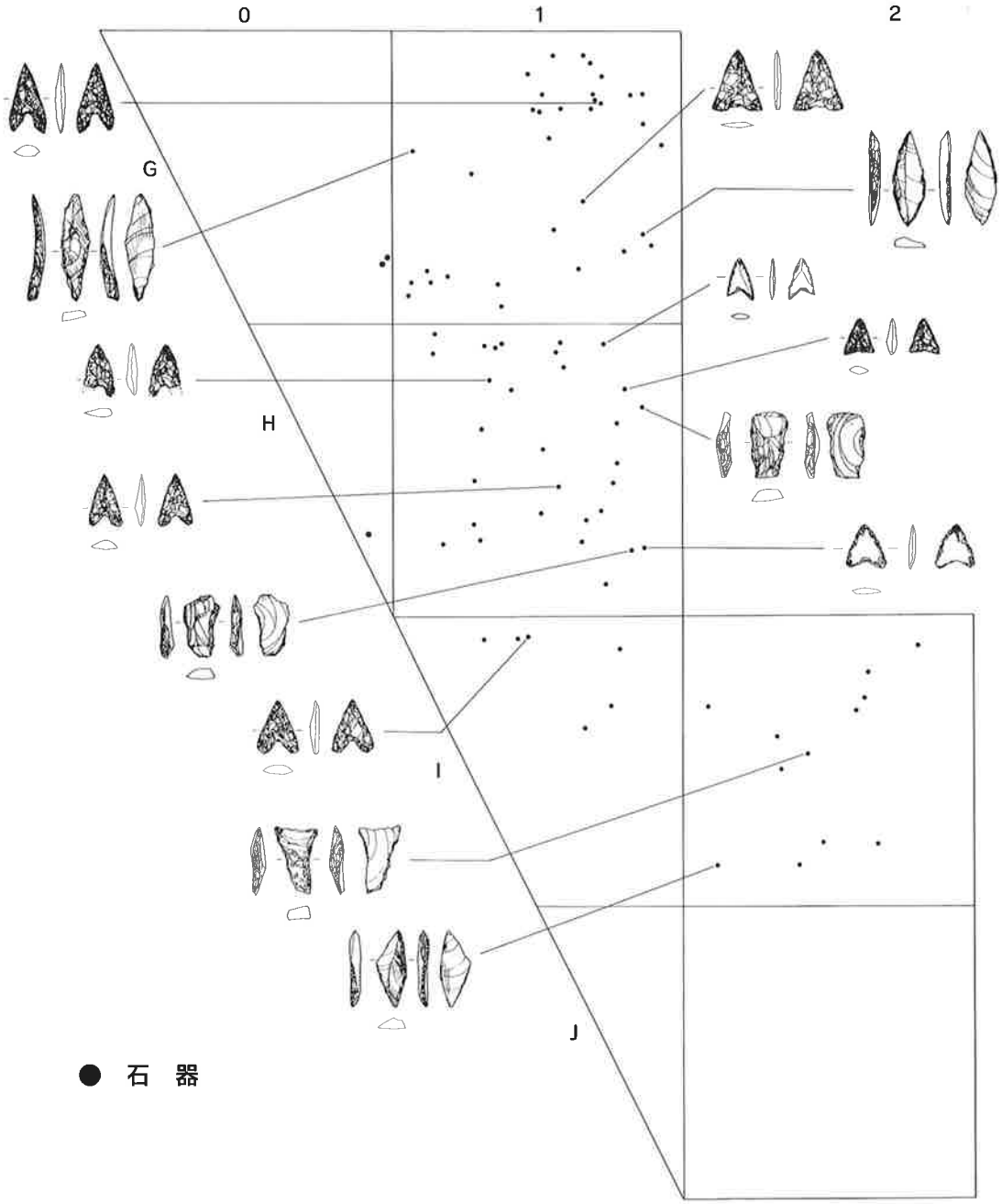
第14図　調査区土層図及び遺物垂直分布図（1/40）



第15図　調査区土層図及び遺物垂直分布図（1/40）



第16図　遺物分布図（1/120）

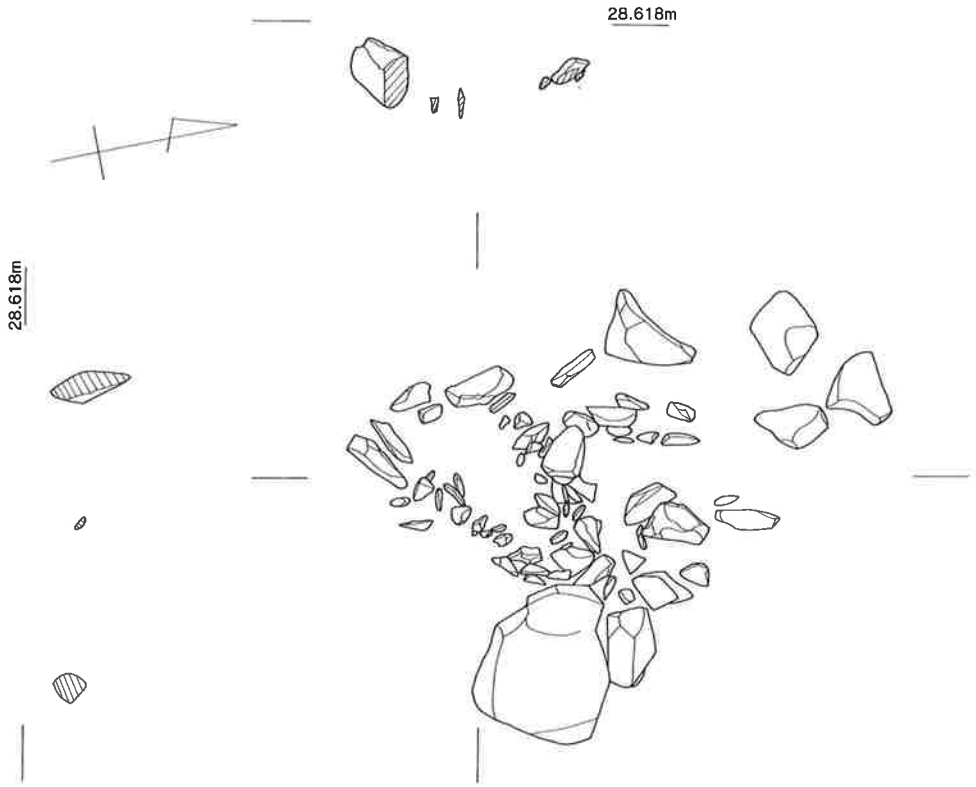


第17図　遺物分布図（1/120）

３．遺　構

遺構としては、Ｂ３区の東から集石遺構を検出した。長軸に244㎝、短軸に220㎝である。使用された石材は玄武岩であった。遺物などの出土はなかった。

土壙は長楕円形で、長軸に173㎝、短軸に59㎝、深さ54cmである。土壙上部には橙褐色の焼土が出土し、土壙内には炭や有機物を含む暗褐色土・灰褐色土が出ている。



第18図　集石遺構実測図（1/20）

4．遺　物

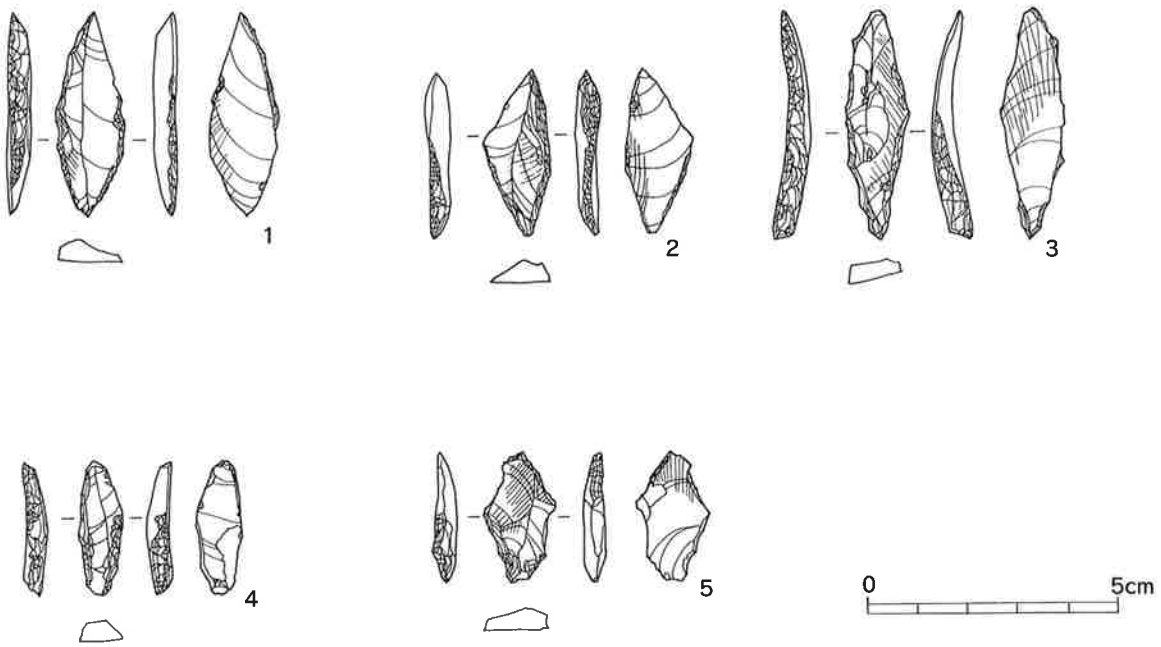
遺物については、Ａ１～Ａ５区、Ｂ１～Ｂ３区のⅠ・Ⅱ（撹乱）・Ⅲ層からは近世以降の陶磁器、縄文土器、弥生土器、黒曜石製品・剥片が出土している。Ⅳ層～Ｖ層では黒曜石製品・黒曜石剥片が多く出土している。また、ＧＯ～Ｇ１区とＨＯ～Ｈ１区のⅡ層では近世以降の陶磁器、安山岩、黒曜石製品・剥片が出土しており、Ｇ１区のⅢ層～Ｖ層では黒曜石製品が出土している。ＨＯ～Ｈ１区、Ｉ１～Ｉ２区、Ｊ１～Ｊ２区でも黒曜石製品・剥片が出土している。約1,500点が出土しているが、破片・砕片が多く、原形をとどめている遺物が少なかった。そのうち実測できた遺物54点を図示した。

１～26は旧石器時代の石器で、１～５はナイフ形石器である。いずれも黒曜石で縦長剥片を用いており、１～３は側縁部の加工は二側縁加工が施され、主要剥離面側からブランティング加工が施されている。４・５は小型のナイフ形石器で、二側縁加工が施され、主要剥離面からブランティング加工が施されている。また先端部と基部の一部が欠損している。５は刃部も欠損している。６～17は台形石器である。いずれも黒曜石を使用しており、刃部に使用痕が見られる。６～９は刃部が基部に平行しており、刃部に最大幅を持つ。基部の両面・刃部に調整加工を施している。10～13は不定形剥片を利用し、斜行した刃部を持っているため、基部とは平行していない。基部の両面・刃部に調整加工を施している。14～17は縦長剥片を利用して、基部表面と刃部の二側縁部に調整加工を施し、背面には加工が見られない。18～20はブレイドである。21は台形石器を作りかけたものと思われる。22は使用痕のある石器で縦長剥片を利用している。23は加工痕のある石器で、使用痕も見られる。24はマイクロブレイドで、使用痕が見られ、先端部が欠損している。25・26は石核である。

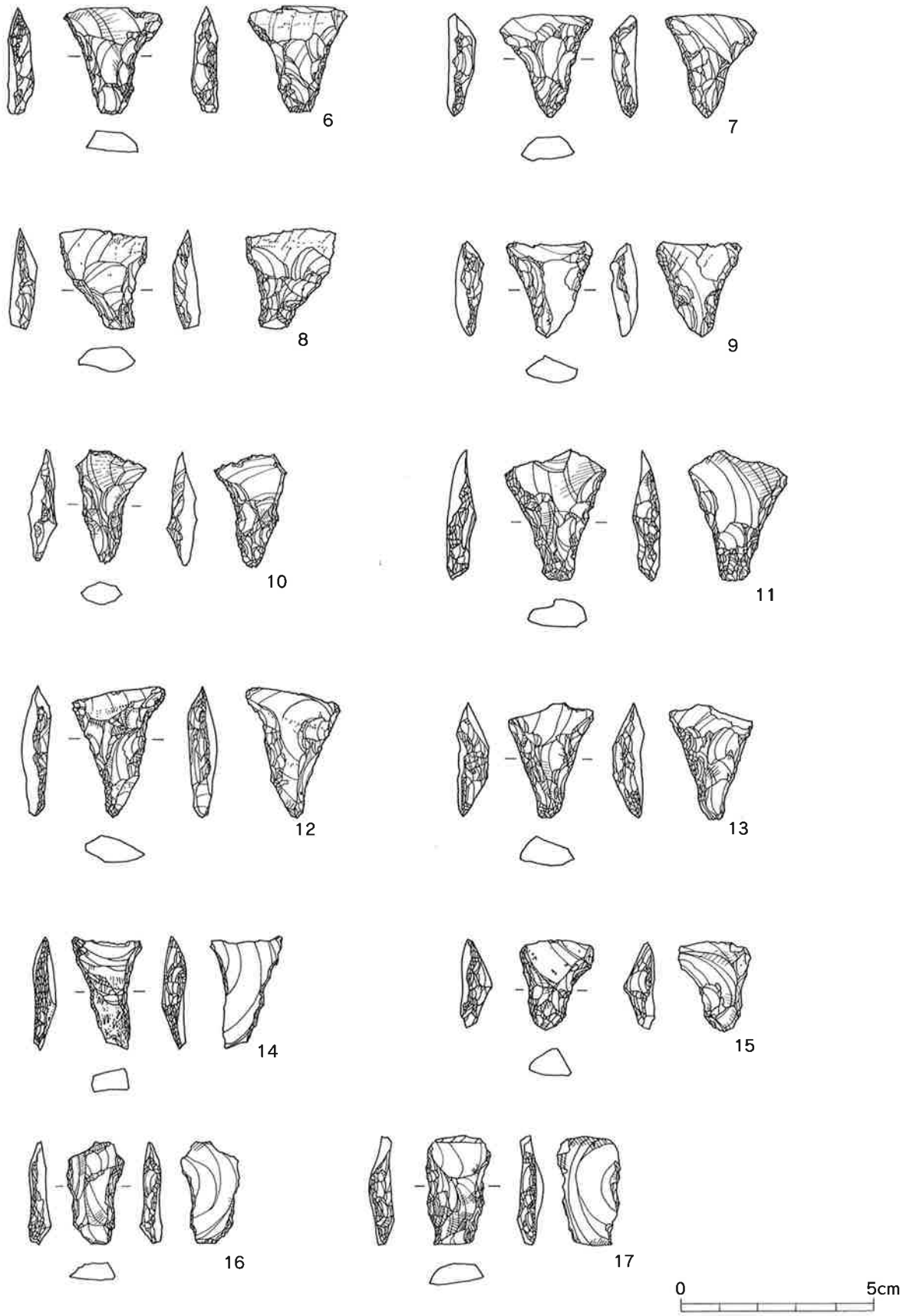
27～49は縄文時代の石鏃である。37の灰色黒曜石製以外は黒色黒曜石製である。27・28は局部磨製石鏃である。27は側縁が鋸歯状に施され、全面研磨されている。28は刃部に非常に細かい鋸歯状の加工が丁寧に施されており、全面研磨されている。先端部の一部と一方の脚部を欠損している。29は鍬形鏃で、先端部から一側を欠損している。30～34は二等辺三角形タイプで先端部が鋭く作り出されており、基部中央の抉入加工が深い。特に30は刃部に細かく鋸歯状加工が施され、緻密な調整がされている。32は両脚端部のごく一部を欠損している。33は一方の脚端部を欠損している。34は脚端部がやや内湾しており、先端部と一方の脚端部を欠損している。35・36・38は正三角形タイプで、いずれも鍬形鏃である。35は基部中央の抉入加工が深く、両脚の間隔が広い。36はかえしの幅が広い。38は先端部と基部平坦部の中央を欠損している。37は二等辺三角形タイプの鍬形鏃で、基部がわずかに内湾している。39は基部中央の抉入加工が深く、脚部がやや内湾している。先端部と側辺を部分的に基部を欠損している。40は脚部が長く、先端部と一方の脚部が欠損している。41は凹みが浅い凹基無茎鏃で基部がわずかに内湾しており、先端と一方の脚端部を欠損している。42～47はいずれも脚部もしくは先端部が欠損している。

48・49は剥片鏃である。48は基部と刃部に加工が施されており、先端部が欠損している。49は刃部から基部へ内湾している。50～53は加工痕のある石器である。53は抉入加工が施されている。54は石核である。

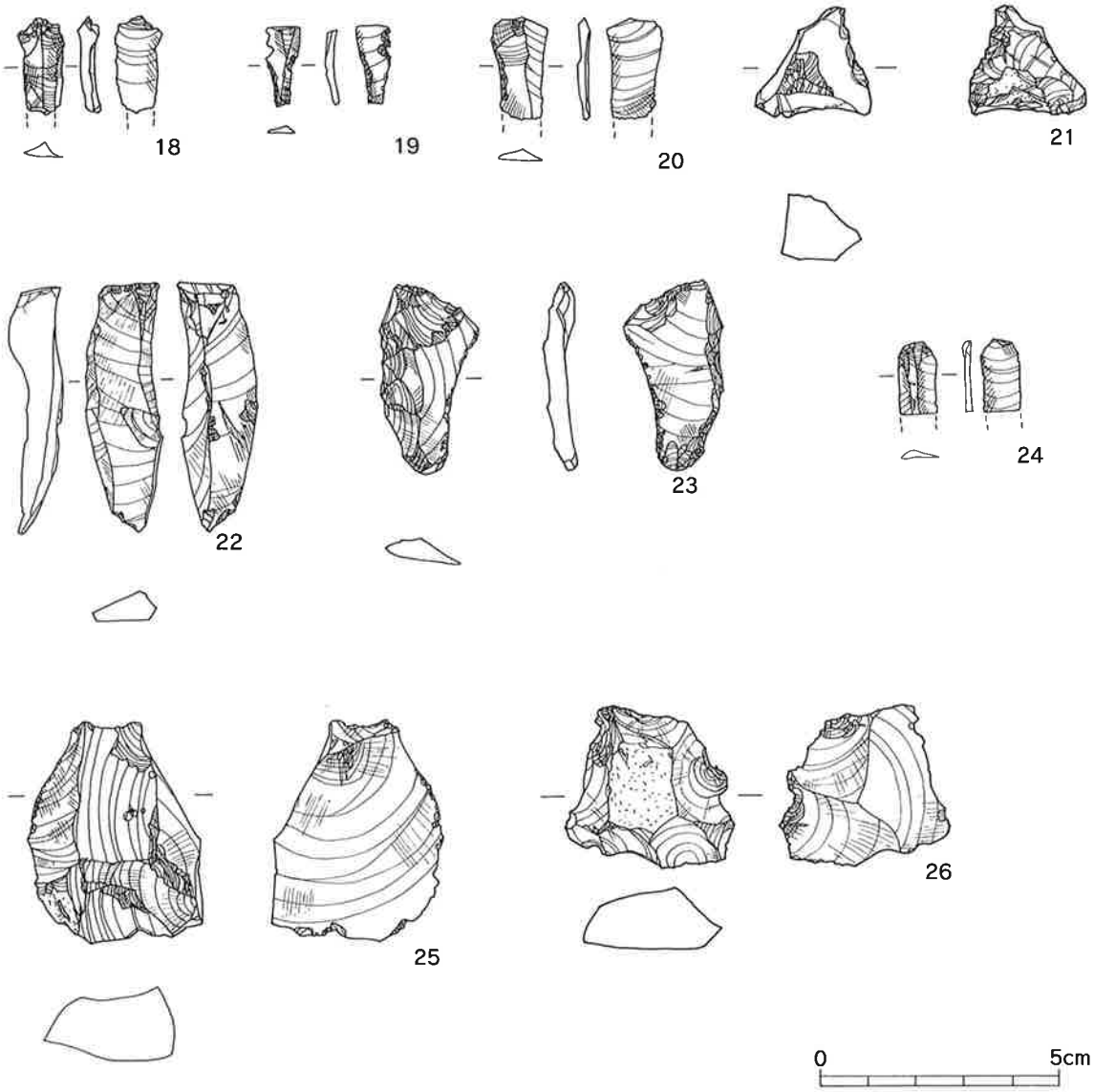
出土遺物については、旧石器から縄文時代のものがほとんどであった。石器については計測表を別に記載している。また、Ａ１区・Ｂ１区、Ａ２・Ｂ２区、Ｂ３区の主にⅣ～Ⅵ層から出土した遺物、Ｈ１区から出土した遺物を対象として垂直分布図を作成している。(第12図～第15図)



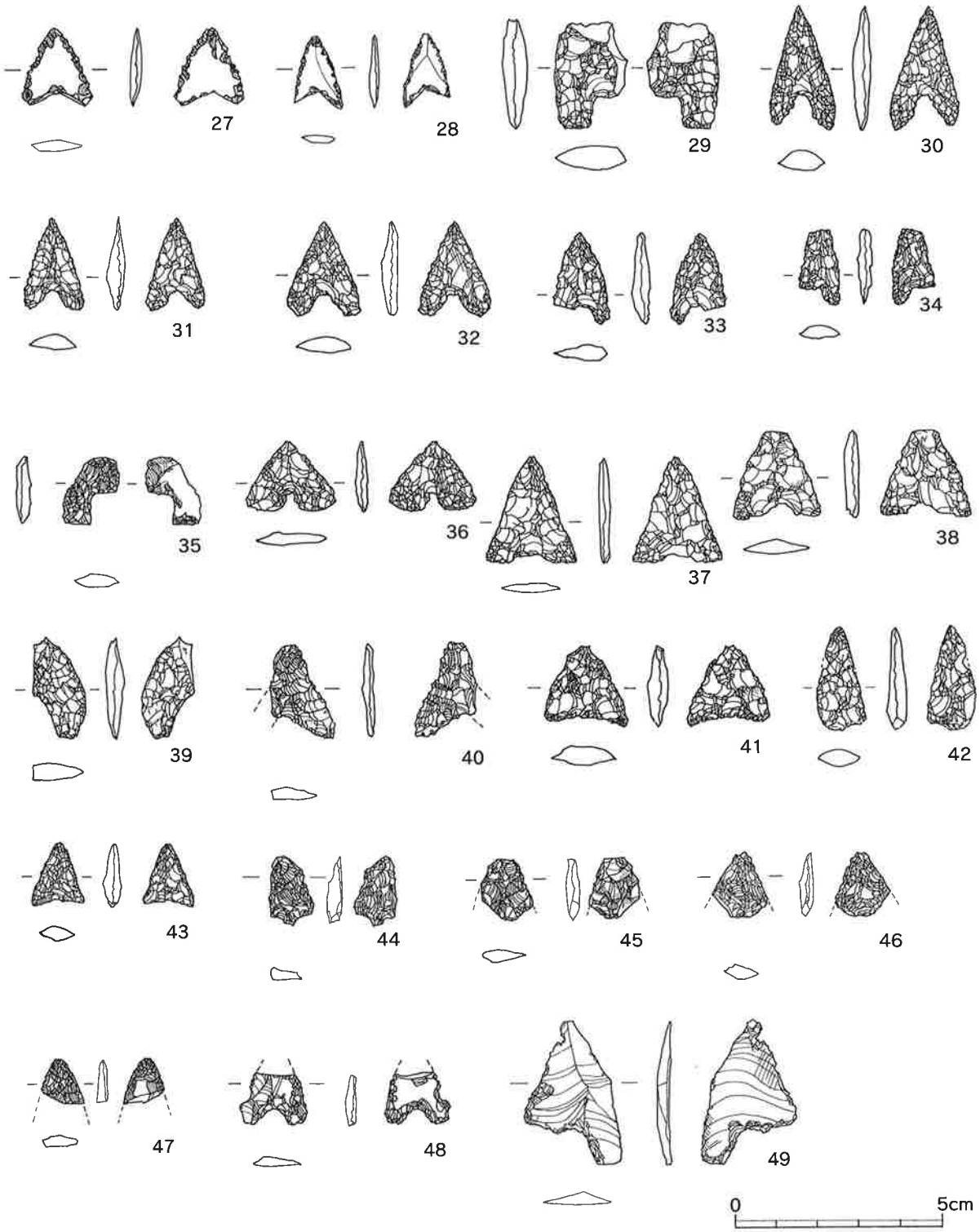
第19図　出土遺物①（2/3）



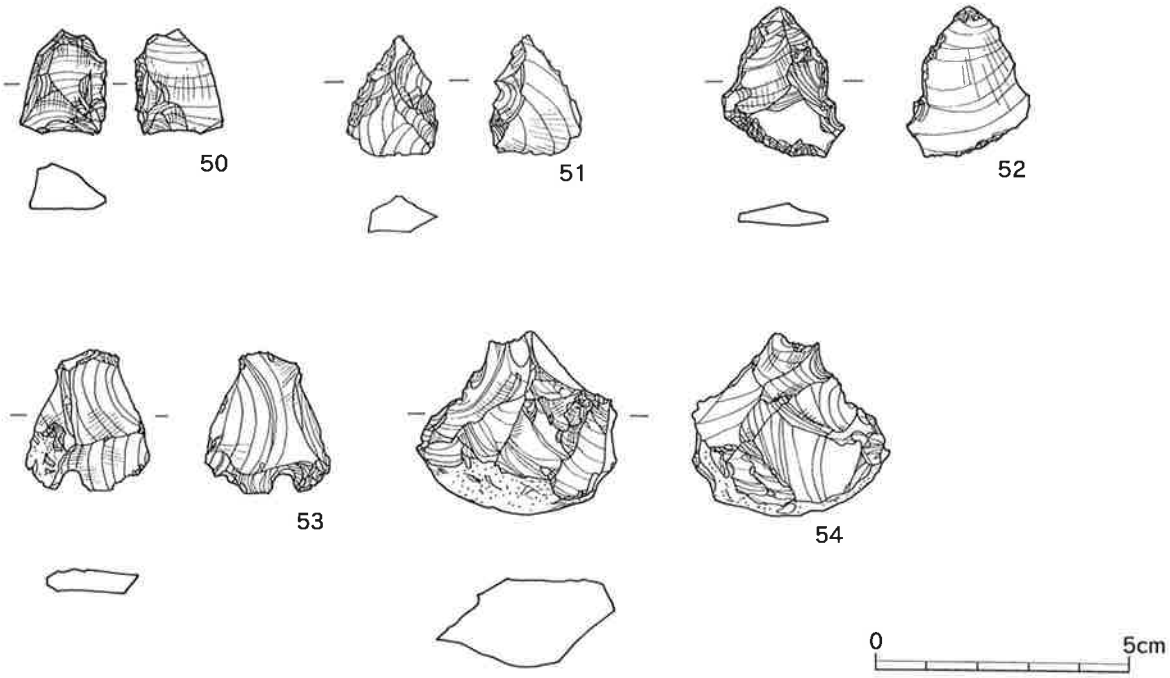
第20図　出土遺物②（2/3）



第21図　出土遺物③（2/3）



第22図　出土遺物④（2/3）



第23図　出土遺物⑤（2/3）

表２　田口高野遺跡出土石器計測表

挿図番号	地区	器種	石質	法量				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	
1	TARG1・S24	ナイフ形石器	黒曜石	4.05	1.35	0.50	2.20	
2	TARI2・S1	ナイフ形石器	黒曜石	3.25	1.30	0.50	1.60	
3	TARG1・S27	ナイフ形石器	黒曜石	4.55	1.25	0.75	2.60	
4	TARB1・II	ナイフ形石器	黒曜石	2.60	0.90	0.50	1.20	先端と基部の一部づつ欠損
5	TARB2・カクラン	ナイフ形石器	黒曜石	2.55	1.45	0.45	1.40	先端と一側基部の一部を欠損
6	TARB2・S57	台形石器	黒曜石	2.70	2.60	0.70	3.00	上部ごく一部欠損
7	TARB2・S21	台形石器	黒曜石	2.65	2.40	0.70	2.80	
8	TARB2・S94	台形石器	黒曜石	2.55	2.30	0.70	2.80	下部欠損
9	TARA2・カクラン	台形石器	黒曜石	2.45	2.20	0.70	2.60	上部一部欠損
10	TARB2・カクラン	台形石器	黒曜石	2.90	1.85	0.75	2.00	上部一角を欠損
11	TARA3・III	台形石器	黒曜石	3.35	2.55	0.70	3.60	上部一部欠損
12	TARA1・カクラン	台形石器	黒曜石	3.35	2.45	0.75	3.20	
13	TARB2・S108	台形石器	黒曜石	2.95	2.15	0.80	2.80	上部欠損
14	TARI2・S6	台形石器	黒曜石	2.90	1.85	0.60	1.80	下部一部欠損
15	TARB2・カクラン	台形石器	黒曜石	2.30	1.90	0.80	2.00	上部一角を欠損
16	TARH1・S26	台形石器	黒曜石	2.65	1.50	0.55	1.80	上部欠損
17	TARH1・S21	台形石器	黒曜石	2.80	1.65	0.65	2.40	上部両角を欠損
18	TARG1・S12	ブレイド	黒曜石	2.00	1.00	0.45	0.51	
19	TARG3・I	ブレイド	黒曜石	1.65	0.70	0.25	0.19	
20	TARH1・S29	ブレイド	黒曜石	2.10	1.15	0.25	0.49	
21	TARB1・I	台形石器？	黒曜石	2.25	2.45	1.35	5.30	
22	TARA1・カクラン	使用痕のある石器	黒曜石	5.15	1.60	1.10	5.91	
23	TARA3・カクラン	加工痕・使用痕のある石器	黒曜石	3.90	2.05	0.65	3.70	
24	TARA3・カクラン	マイクロブレイド	黒曜石	1.50	0.80	0.15	0.25	
25	TARI2・S4	石核	黒曜石	4.55	3.60	1.50	25.08	
26	TARA2III・S1	石核	黒曜石	3.35	3.50	1.30	12.18	
27	TARH1・S20	磨製石鏃	黒曜石	1.90	1.60	0.25	0.70	
28	TARH1・S10	磨製石鏃	黒曜石	1.75	1.15	0.20	0.30	先端と脚の一方を欠損
29	TARG2・I	石鏃	黒曜石	1.75	1.75	0.70	2.20	先端部から一側を欠損
30	TARG1・S5	石鏃	黒曜石	3.00	1.65	0.45	1.40	
31	TARH1・S11	石鏃	黒曜石	2.25	1.45	0.45	0.80	
32	TARI1・S1	石鏃	黒曜石	2.30	1.80	0.40	1.00	両脚端部ごく一部欠損
33	TARH1・S5	石鏃	黒曜石	2.20	1.35	0.45	0.80	一方の脚を欠損
34	TARA5・II・III	石鏃	黒曜石	1.80	1.00	0.30	0.40	先端と脚の一方を欠損
35	TARA3・カクラン	石鏃	黒曜石	1.65	1.35	0.35	0.43	先端部と脚の一方を欠損
36	TARB3・カクラン	石鏃	黒曜石	1.70	2.15	0.30	0.80	
37	TARG1・S16	石鏃	灰色黒曜石	2.55	2.15	0.30	1.00	先端部と基部中央部欠損
38	TARA5・I	石鏃	黒曜石	2.10	2.15	0.40	1.20	先端部と基部平坦部の中央を欠損
39	TARG3・I	石鏃	黒曜石	2.45	1.30	0.45	1.00	先端部から一側を大きく欠損
40	TARA1・B1・II・III	石鏃	黒曜石	2.25	1.55	0.30	0.68	先端部と脚の一方を欠損
41	TARB2・カクラン	石鏃	黒曜石	1.95	2.00	0.50	1.40	先端と一方の脚端部を欠損
42	TARG3・I	石鏃	黒曜石	2.45	1.20	0.45	1.00	先端部のごく一部側辺部分的に基部を欠損
43	TARH1・S18	石鏃	黒曜石	1.50	1.25	0.45	0.40	基部と先端のごく一部欠損
44	TARB1・カクラン	石鏃	黒曜石	1.70	1.05	0.35	0.50	両脚と先端部から一側にかけて大きく欠損
45	TARB2・I	石鏃	黒曜石	1.45	1.20	0.30	0.50	先端部と両脚を欠損
46	TARA2・カクラン	石鏃	黒曜石	1.55	1.30	0.35	0.59	先端部と両脚を欠損
47	TARB1・カクラン	石鏃	黒曜石	1.10	1.00	0.25	0.20	先端のごく一部と基部を欠損
48	TARI2・S5	剥片鏃	黒曜石	1.25	1.60	0.25	0.41	先端部を欠損
49	TARG1・II・III	剥片鏃	黒曜石	3.50	2.30	0.35	1.55	脚の一方を欠損
50	TARG2・I	加工痕のある石器	黒曜石	2.05	1.70	0.90	2.88	
51	TARA2・I	加工痕のある石器	黒曜石	2.40	1.80	0.70	2.08	
52	TARI1・S6	加工痕のある石器	黒曜石	2.95	2.40	0.45	3.00	
53	TAR・表採	加工痕のある石器	黒曜石	2.80	2.45	0.45	2.69	
54	TARH・表採	石核	黒曜石	3.65	3.95	1.75	23.70	

第Ⅳ章　科学分析

Ⅰ．田口高野遺跡の土層とテフラ

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

九州地方北部には、阿蘇カルデラや姶良カルデラなどの巨大火山から噴出したテフラ（tephra，火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く分布している。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、それらとの関係を遺跡で求めることにより、地層や土壌の年代のみならず、遺構や遺物の年代などについても知ることができるようになっている。さらに最近では、東アジア一帯を覆うような広域テフラがいくつも発見されており、広い範囲で遺構や遺物の新旧関係などに関する資料を収集できるようになっている（Machida and Arai, 1983, 町田・新井，1992）。

そこで、石器が検出された松浦市御厨町田口高野遺跡においても地質調査を行うとともに、採取された試料を対象に火山ガラス比分析と屈折率測定を行い、示標テフラとの層位関係から石器の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、B-2グリッドおよびB-3グリッドの２地点である。

２．土層の層序

（1）B-2グリッド

B-2グリッドでは、下位より灰褐色粘土（層厚10cm以上）、礫混じり褐色土（層厚10cm，礫の最大径13mm）、褐色砂礫層（層厚８cm，礫の最大径８mm）、褐色土（層厚11cm）、礫混じりで若干赤みを帯びた褐色土（層厚31cm，礫の最大径３mm，Ⅵ層）、褐色土（層厚18cm，Ⅴ層）、暗灰褐色土（層厚20cm，Ⅳ層）、作土（層厚45cm）が認められる（図１）。発掘調査では、これらのうちⅥ層から石器が検出されている。

（2）B-3グリッド

B-3グリッドでは、下位よりマンガンを多く含む褐色土（層厚10cm以上）、若干赤みを帯びた褐色土（層厚11cm，Ⅵ層）、黄褐色土（層厚12cm）、褐色土（層厚７cm，以上Ⅴ層）、暗褐色土（層厚12cm）、暗褐色土（層厚７cm，以上Ⅳ層）、若干赤みを帯びた褐色土（層厚９cm）、褐色土（層厚19cm，以上Ⅲ層）、盛土（層厚43cm，Ⅱ層）、灰褐色土（層厚12cm，作土）が認められる（図２）。発掘調査では、Ⅵ層からⅣ層にかけて石器が検出されている。とくにⅤ層に多くの石器が含まれているようである。

３．火山ガラス比分析

（1）分析方法

示標テフラの降灰層準を求めるために、B-2グリッドおよびB-3グリッドの２地点において、基本的に厚さ５㎝ごとに採取された試料のうち、５㎝おきを中心とした19点を対象に分析を行うことにした。分析としては、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析を試みた。実際に検出された重鉱物の量はごくわずかで、結果的に火山ガラス比分析を行うことになった。分析処理の手順は、次の通りである。

1）試料15gを秤量。

2）超音波洗浄装置により泥分を除去。

3）恒温乾燥器により80°Cで乾燥。

4）分析篩により1/4-1/8㎜の粒子を篩別。

5）偏光顕微鏡下で250粒子を検鏡し、火山ガラスの色調別、形態別組成を求める。

（2）分析結果

B-2グリッドおよびB-3グリッドおける分析結果を、ダイヤグラムにして図３と図４に示す。また、分析結果の内訳を表１に示す。B-2グリッドでは、試料５（Ⅴ層上部）に透明なバブル型（平板状）火山ガラスの出現ピークが認められる。試料５におけるその比率は、4.8%である。B-3グリッドでは、試料９（Ⅳ層下部）に透明なバブル型火山ガラスの出現ピークが認められる。試料９におけるその比率は、6.8%である。テフラ粒子の出現ピークをそのテフラの降灰層準とすると、本遺跡ではⅤ層上部からⅣ層下部にかけての層準に透明なバブル型火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられる。

またB-3グリッドでは、試料３や試料１（いずれもⅢ層）に、褐色や淡褐色のバブル型ガラスが少量含まれている。とくに試料１に多くのバブル型ガラスが含まれていることから、この試料付近に有色のバブル型火山ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられる。

４．屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

火山ガラス比分析により、テフラの降灰層準があると考えられたB-2グリッドの試料５とB-3グリッドの試料１、さらにB-3グリッドにおいて透明なバブル型火山ガラスが出現しはじめる試料13の３試料について、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）により屈折率を測定し、示標テフラとの同定を行った。

（2）測定結果

屈折率測定の結果を、表２に示す。含まれる火山ガラスの最大径は、いずれも1.0㎜である。B-2グリッドの試料５に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.498-1.501（modal range: 1.499-

1.500）である。B-2グリッドの試料13に含まれる火山ガラスの屈折率（n）も、1.498-1.501（modal range: 1.499-1.500）である。さらに、B-2グリッドの試料１に含まれる火山ガラスの屈折率（n）は、1.499-1.512である。この試料に含まれる火山ガラスの屈折率は、1.499-1.501と1.510-1.512にmodal rangeがあり、bimodalな組成になっている。なお、B-2グリッドの試料13には角閃石、試料１には斜方輝石や単斜輝石がごく少量含まれている。

５．考察

B-2グリッドの試料５に含まれる火山ガラスの形態や色調さらに屈折率などから、Ⅴ層上部からⅣ層下部にかけて層位があると考えられるテフラは、約2.4～2.5万年前*1に姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，池田ほか，1995）と考えられる。なお、B-3グリッドの試料13についての分析結果から、この地点においては何らかの攪乱作用により、かなり下位の層準にATに由来する火山ガラスが及んでいると考えられる。また、B-3グリッドの試料１に含まれる火山ガラスの形態や色調さらに屈折率などから、Ⅲ層に降灰層準があるテフラは、約6,300年前*1に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）と考えられる。

以上の分析結果から、田口高野遺跡で検出された石器は、ATの下位からK-Ahの下位にかけての層位にあり、とくにATより下位の層準から多くの石器が検出されていると考えられる。

６．小結

田口高野遺跡において、石器の層位や年代に関する資料を収集するために、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、姶良Tn火山灰（AT，約2.4～2.5万年前*1）と鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前*1）の降灰層準を明らかにすることができた。そして、石器はATの下位からK-Ahの下位にかけて検出されており、とくにATの下位に多くの石器の層位があると考えられた。

松浦市域では、ほかにも約7～9万年前に阿蘇火山から噴出した阿蘇４火山灰（Aso-4，Nagaoka，1988，町田ほか，1983，町田ほか，1985）、約7.5～9.5万年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界葛（とずら）原（はら）火山灰（K-Tz，町田・新井，1992）など、さらに多くの広域テフラを検出できる可能性があり、火山灰編年学による中～後期旧石器時代遺物の編年ができる。

*1　放射性炭素（^{14}C）年代．暦年代とは異なることに注意．

文献

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２－研究対象別分析法」，p.138-149.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・小林哲夫（1995）南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器^{14}C年代．第四紀研究，34，p.377-379.

町田　洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－．科学，46，p.339-347.

町田　洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究，17，p.143-163.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

Machida, M. and Arai, F. (1983) Extensive ash falls in and around the Sea of Japan from late:Quaternary eruptions. Jour.Volcanol.Geotherm.Res., 18, p.151-164.

町田　洋・新井房夫・長岡信治（1983）広域テフラによる南関東と南九州の後期更新世海成段丘の対比．日本第四紀学会講演要旨集，no.13，p.45-46.

町田　洋・新井房夫・百瀬　貢（1985）阿蘇４火山灰－分布の広域性と後期更新世示標層としての意義－．火山，第２集，30，p.49-70.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）姶良Tn火山灰（AT）の^{14}C年代．第四紀研究，26，p.79-83.

Nagaoka, S. (1988) The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay,southern Kyushu,Japan. Geog.Rept.Tokyo Metropol.Univ., 23, p.49-122.

表１　火山ガラス比分析結果

地点	試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
B-2ｸﾞﾘｯﾄﾞ	1	3	0	0	0	0	0	247	250
	3	8	0	0	0	0	0	242	250
	5	12	0	0	0	0	0	238	250
	7	11	0	0	0	0	0	239	250
	9	5	0	0	0	0	0	245	250
	11	1	0	0	0	0	0	249	250
	13	2	0	0	1	0	0	247	250
	15	0	0	0	0	0	0	250	250
	17	0	3	0	0	0	0	250	250
B-3ｸﾞﾘｯﾄﾞ	1	12	1	0	0	0	0	237	250
	3	3	0	1	0	0	0	246	250
	5	5	0	0	0	0	0	245	250
	7	12	0	0	1	0	0	237	250
	9	17	0	0	1	0	0	232	250
	10	12	0	0	0	0	0	238	250
	11	6	0	0	1	0	0	243	250
	12	4	0	0	0	0	0	246	250
	13	7	0	0	0	0	0	243	250
	15	0	0	0	0	0	0	250	250

数字は粒子数．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：透明，pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状発泡，fb：繊維束状発泡．

表２　屈折率測定結果

グリッド	試料	火山ガラス		重鉱物
		最大径	屈折率（n）	
B-2	5	1.0	1.498-1.501 (1.499-1.500)	-
B-3	1	1.0	1.499-1.512 (1.499-1.501,1.510-1.512)	(opx,cpx)
B-3	13	1.0	1.498-1.501 (1.499-1.500)	(ho)

最大径の単位は，mm．屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．（）は，modal rangeを示す．opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石．重鉱物の（）は，量が少ないことをを示す．

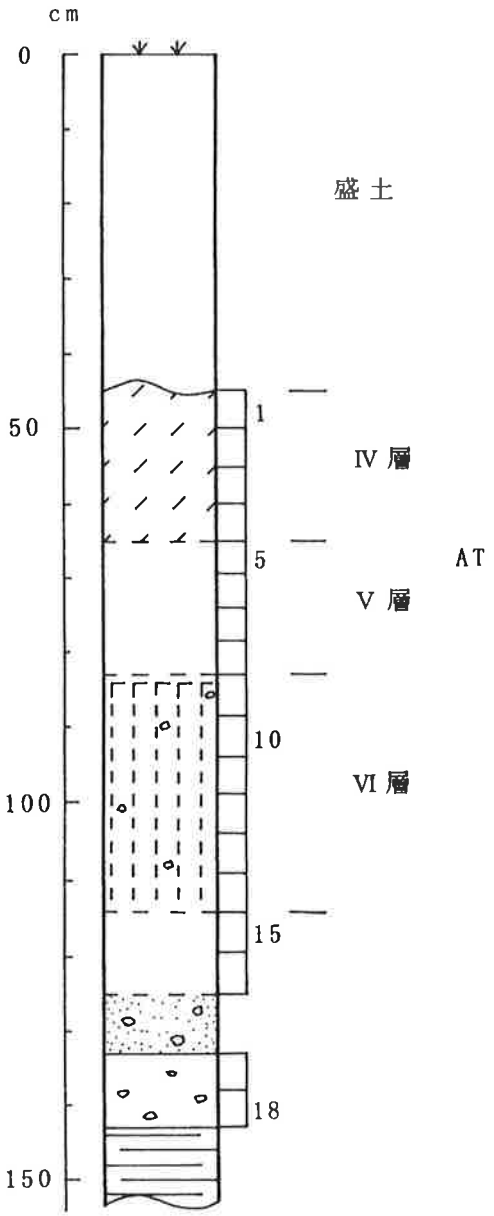


図１　Ｂ－２グリッドにおける土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

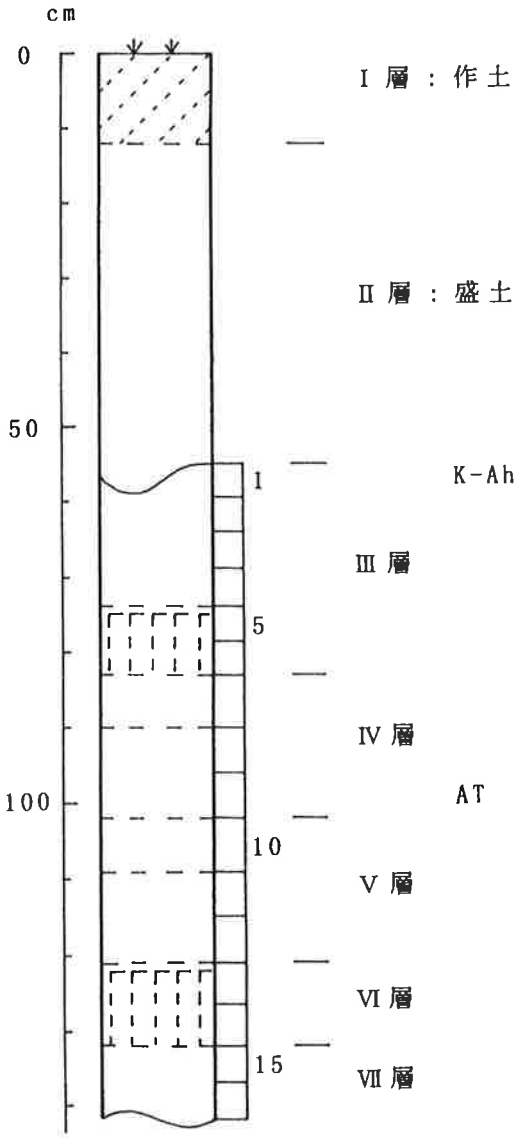
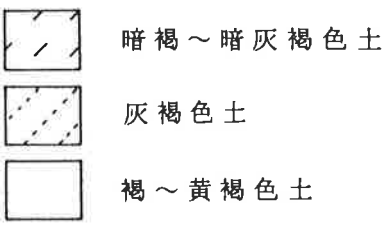
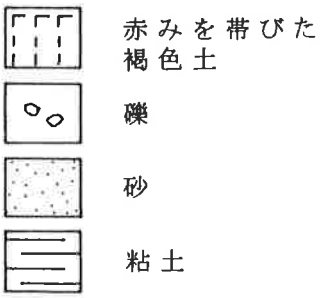


図２　Ｂ－３グリッドにおける土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号





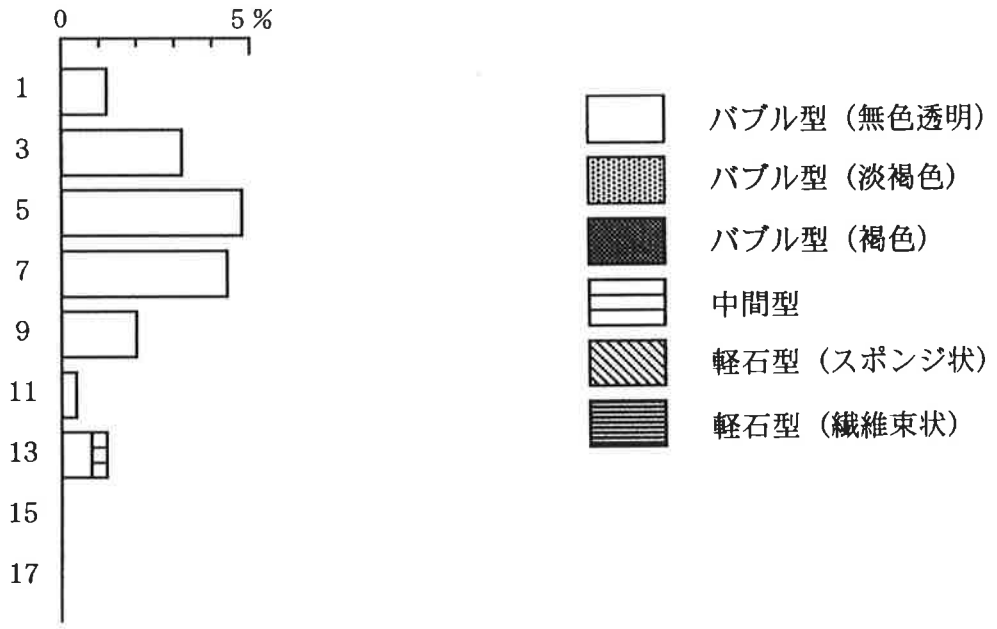


図３　Ｂ－２グリッドにおける火山ガラス比ダイヤグラム

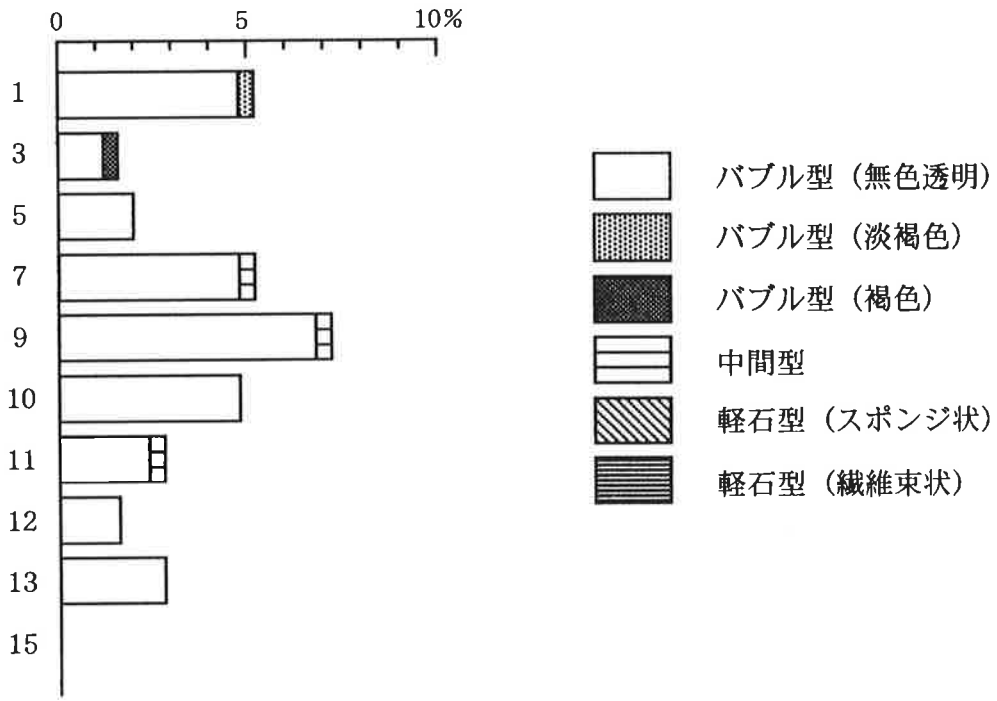


図４　Ｂ－３グリッドにおける火山ガラス比ダイヤグラム

Ⅱ．田口高野遺跡における植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

２．試料

分析試料は、B-2グリッドおよびB-3グリッドから採取された計13点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１gに直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μm以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）の換算係数は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4．分析結果

（1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１、図２に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

キビ族型、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）、その他

（2）植物珪酸体の検出状況

1）B-2グリッド

Ⅵ層（試料３）およびその下層（試料４、５）では、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。Ⅴ層（試料２）からⅣ層（試料１）にかけては、ミヤコザサ節型が増加傾向を示しており、ウシクサ族Ａなども検出された。

2）B-3グリッド

Ⅶ層（試料８）では、植物珪酸体はほとんど検出されなかった。Ⅵ層（試料７）からⅤ層（試料３）にかけては、クマザサ属型やミヤコザサ節型が検出されたが、いずれも少量である。Ⅳ層（試料３、４）では、ミヤコザサ節型が増加しており、ウシクサ族Ａも検出された。Ⅲ層（試料１、２）では、ブナ科（シイ属）やマンサク科（イスノキ属）が出現している。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。なお、すべての樹種で植物珪酸体が形成されるわけではなく、落葉樹では形成されないものも多い。

5．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

Ⅵ層より下位の堆積当時は、河川の影響など何らかの原因でイネ科植物の生育には適さない環境であったと考えられる。Ⅵ層からⅤ層にかけては、クマザサ属（おもにミヤコザサ節）などのササ類が生育するイネ科植生であったと考えられ、姶良Tn火山灰（AT，約2.4-2.5万年前）より上位のⅣ層の時期にはクマザサ属（おもにミヤコザサ節）などのササ類が増加したと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、ネザサ率（両

者の推定生産量の比率）の変遷は、地球規模の氷期－間氷期サイクルの変動とよく一致することが知られている（杉山・早田）。また、クマザサ属のうちチシマザサ節やチマキザサ節は積雪に対する適応性が高いとされ、ミヤコザサ節は太平洋側の積雪の少ないところに分布している（室井，1960）。これらのことから、当時は比較的積雪の少ない寒冷で乾燥した環境であったと推定される。クマザサ属は常緑であり、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻，1992）。遺跡周辺にササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前）より下位のⅢ層の堆積当時は、周辺にシイ属やイスノキ属などの照葉樹林が分布していたと考えられ、その林床や縁辺にササ類やウシクサ族が生育していたと推定される。

文献

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号，p.70-83.

杉山真二・早田勉（1996）植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定－中期更新世以降の氷期－間氷期サイクルの検討－．日本第四紀学会　講演要旨集，26，p.68-69.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38(2)，p.109-123.

杉山真二（1999）過去約３万年間におけるササ類の植生変遷と積雪量の変動－植物珪酸体分析からみた過去のミヤコザサ線－．日本植生史学会大会発表要旨集，p.29-30.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

高槻成紀（1992）北に生きるシカたち－シカ、ササそして雪をめぐる生態学－．どうぶつ社.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

室井綽（1960）竹笹の生態を中心とした分布．富士竹類植物園報告，5，p.103-121.

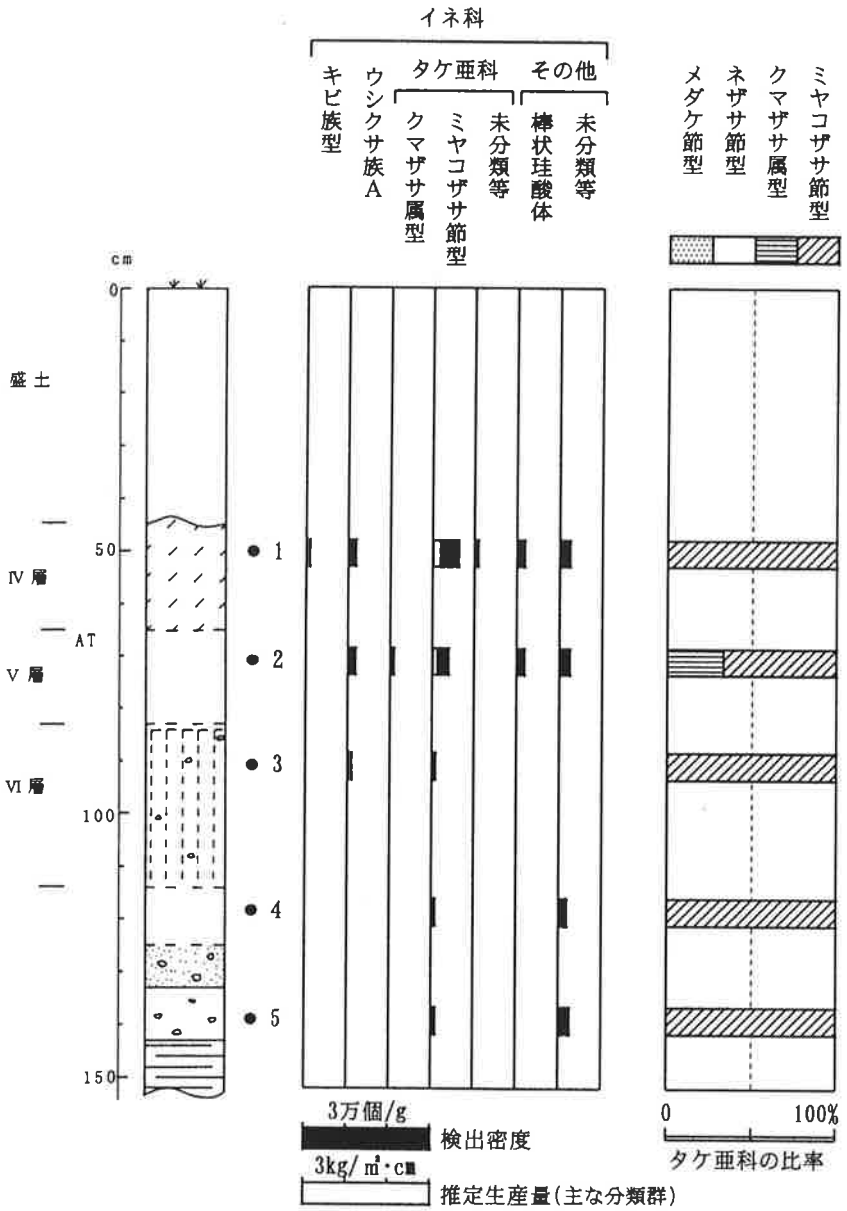


図1　田口高野遺跡、B-2グリッドにおける植物珪酸体分析結果

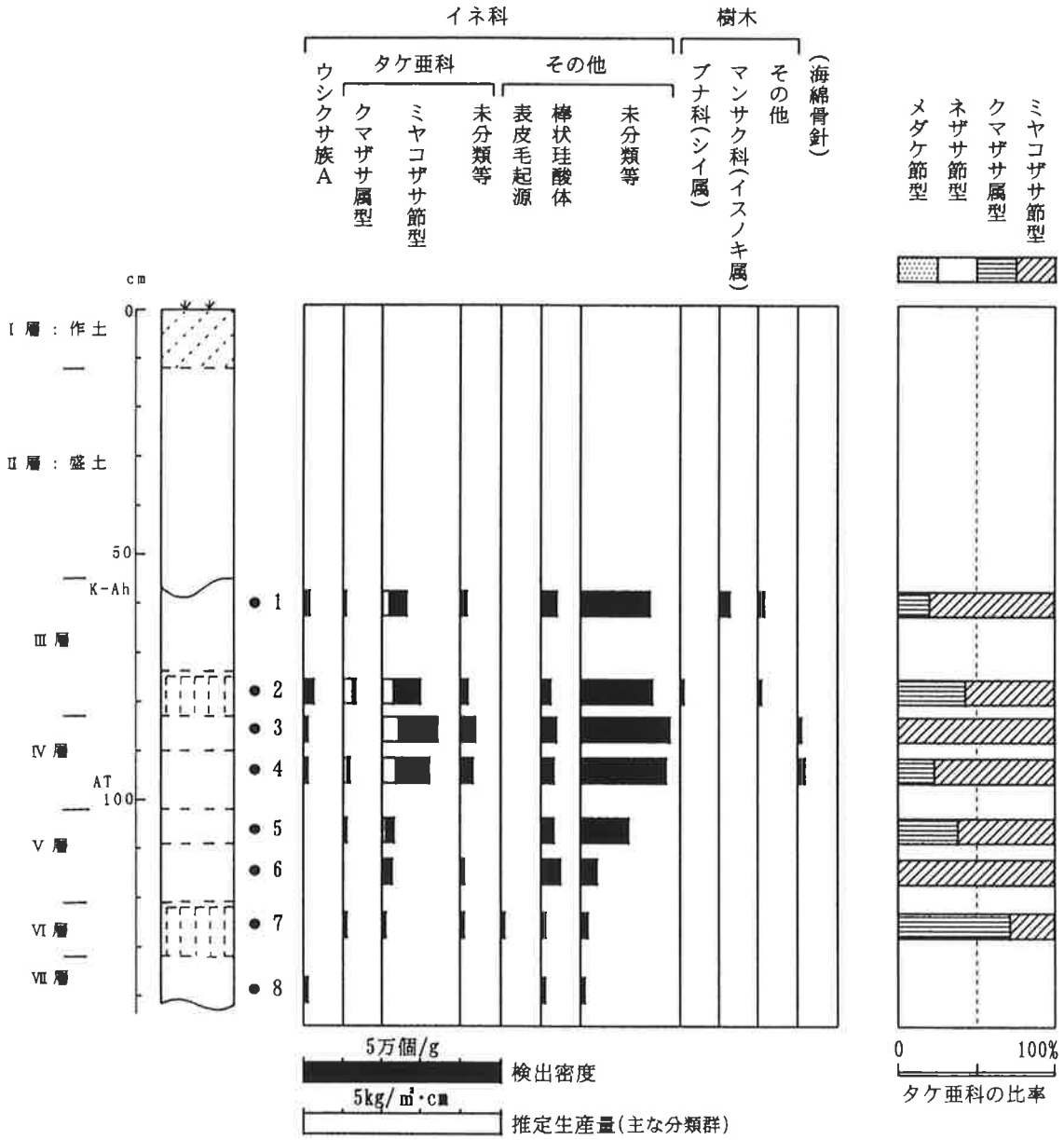


図２　田口高野遺跡、Ｂ-３グリッドにおける植物珪酸体分析結果

表1　松浦市、田口高野遺跡における植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	地点・試料	B-2グリッド					B-3グリッド							
			1	2	3-1	4	5	1	2	3	4	5	6	7	8
イネ科	Gramineae (Grasses)														
キビ族型	Paniceae type		7												
ウシクサ族A	Andropogoneae A type		15	15	7			12	22	7	7				8
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)														
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)			7				6	30		14	7		7	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*		60	37	7	7	8	61	96	142	120	28	23	7	
未分類等	Others		7					12	15	35	28		8	7	
その他のイネ科	Others														
表皮毛起源	Husk hair origin													7	
棒状珪酸体	Rod-shaped		15	15				37	22	35	28	28	45	7	8
未分類等	Others		22	22		15	23	171	177	220	212	117	38	15	8
樹木起源	Arboreal														
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*								7						
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*							24							
その他	Others							12	7						
(海綿骨針)	Sponge									7	14				
植物珪酸体総数	Total		127	97	15	22	30	336	376	439	410	180	113	52	23

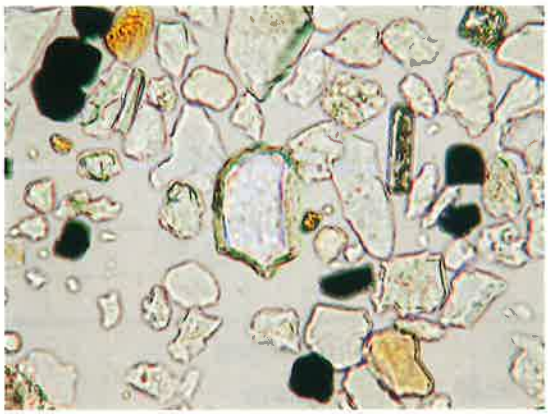
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²・cm）

クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		0.06				0.05	0.22		0.11	0.05		0.06	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	0.18	0.11	0.02	0.02	0.02	0.18	0.29	0.43	0.36	0.08	0.07	0.02	

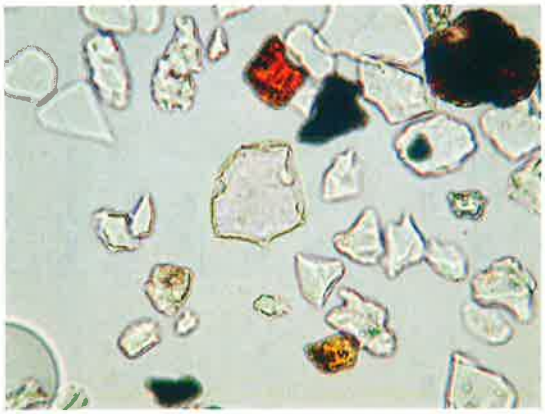
タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. *Medake*														
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. *Nezasa*														
クマザサ属型	*Sasa* (except *Miyakozasa*)		33				20	43		23	38		71	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. *Miyakozasa*	100	67	100	100	100	80	57	100	77	62	100	29	

ウシクサ族A
B-3　4



クマザサ属型
B-3　4



ミヤコザサ節型
B-3　1

棒状珪酸体
B-3　4

シイ属
B-3　2

イスノキ属
B-3　1

50μm

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

第Ⅴ章　ま　と　め

今回の田口高野遺跡の発掘調査は、遺跡の保存ができなかった11号排水路関係と、遺跡内でも一番高い旧畑地の削平される地区の記録保存の調査であった。調査は工事設計等の事務関係で、調査予定より遅れ、平成12年３月から12年５月までの２か年にまたがった発掘調査になってしまった。

調査の結果、Ｂ２・Ｂ３区のテフラの分析では、火山ガラスが検出された。火山ガラスは緩い曲率を持った平板状のいわゆるバブル型を呈し、さらに屈折率などから姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ：約24,000年～25,000年前）であることが確認された。降灰層準はⅤ層上部（暗褐色粘質土）からⅣ層下部（灰褐色粘質土）にかけてである。また、Ｂ３区の試料には鬼界アカホヤ火山灰（Ｋ－Ａｈ：6,300年前）も確認された。いずれの火山灰も松浦市においては初めての分析結果であり、今後の調査においてもテフラ分析の必要性がでてきたのはいうまでもない。

西北九州では、広域テフラが分布していてその後の浸食作用からテフラを保護する堆積物に乏しいためテフラの保存状態が悪く、テフロクロノロジーを用いた考古学的な編年研究を行うには非常に難しいといわれている。保存状態さえ良ければテフロクロノロジーを活用することができる一例である。

旧石器時代の遺跡は、平面的には石器・剥片・石核などの遺物が径約２～４ｍの範囲に集中して出土する傾向を見せている。こうした集中する部分は「ユニット」あるいは「ブロック」と呼ばれている。また、時期的変遷を研究するために標高レベルによる遺物の集中域を抽出する必要があり、このような集中域をもって遺構とされているが、これは層序関係が大きく関与し、石器文化の細分のためには層の厚さは厚ければ厚いほど有効性が高いといわれている。このため質・量ともに豊かな資料を提供する松浦玄武岩風化台地だが貧弱な堆積層の中に時代幅のある重複した文化層が存在し、異なる文化層の石器群との混在により、遺構考察ができない極めて不利な側面を持っている地域でもある。このため発掘調査の中で環境や状況により左右されやすい人々の行動や行為を予測することは非常に困難であることはいうまでもない。遺跡自体の評価は調査面積に規制され、また、左右されると考えられている。旧石器時代の遺跡は遺物集中域、礫群などの相互関係を明らかにして遺跡の構造を解明していく作業が不可欠である。

田口高野遺跡では、遺物が包含されている地区がＢ２区Ⅳ層からＸ層に看取される遺跡構造を検討するため包含層内の遺物出土状況、つまり遺物の集散分布を第16図で検討するとＢ２区（中央部分は確認調査で取り上げ）を中心に南北軸約10ｍの範囲で展開していることがわかる。また、調査区に対して東側のＡ区では無遺物層が存在している。主体は台形石器で、台形石器は基本的には幅広剥片剥離系の石器群として理解されるもので、技術的には側縁加工で背面・主要剥離面への平坦剥離が主体となっている。平坦剥離の顕著な「枝去木型台形石器」に属するタイプである。

そこで問題となるのがこれらの台形石器の編年的位置づけである。剥片剥離による素材の確保は、台形石器製作パターンにそったものであり、打面側の打瘤除去による平坦剥離を含む整形技術は台形石器製作において典型的な技術バリエーションとして台形石器石器群の展開の中で理解されるもので

あり、日ノ岳Ⅱ層の台形石器群にみることができる。日ノ岳Ⅱ層はナイフ形石器文化後期に位置づけられているが、本遺跡のＡＴより降灰前後のナイフ形石器文化中期までさかのぼる資料として問題提起をしたい。中期は剥片尖頭器・角錐状石器などの新器種が登場するが、その中期前半代の段階に位置づけされるのではなかろうか。

遺跡の評価は、石器群技術の復元としての接合関係の問題、石器素材としての黒曜石原産地の問題、ユニット分析における上関係の問題など山積している。こうした問題は残念ながら与えられた時間内では検討することができなかった。記録保存の一応の成果の中で検討できなかったことは記録者の怠慢の謗りを免れないものであり後顧の事として将来に果たしたい。

今回の調査は、面積からくる制約が大きく作用する旧石器時代の遺跡が対象であったため十分資料を生かし切れなかったが、ユニット等を確認したことで田口高野遺跡の空間構造の理解が深まったと考えたい。現在の地形は東・北・西の丘陵で囲まれ、南側に開けた谷に面する緩斜面に立地している。平成８年度に実施した確認調査の結果、後世の果樹園造成の際に大規模な地形改変が行われ、この際に田口高野遺跡の中心集落は破壊を受けたものと考えられる。このことを考えると遺跡が依存するということはさまざまな偶然が生み出した産物であることが認識されるのである。

最後になったが、今回の発掘調査から報告書作成において、多くの方々のご協力を得たことを記して感謝したい。短時間での資料の整理・実測・図化作業に従事してくれた整理補助員諸氏にはこの場を借りて感謝の言葉を述べたい。

引用参考文献

松藤和人　1987　「西日本におけるＡＴ下位の石器群」　国立歴史民俗博物館研究報告　第13集　国立歴史民俗博物館

田島龍太　1990　「枝去木山中遺跡」　唐津市文化財調査報告書　第39集　唐津市教育委員会

田島龍太　1993　「日ノ出松遺跡」　唐津市文化財調査報告書　第55集　唐津市教育委員会

仁田坂聡　2000　「野原遺跡」　唐津市文化財調査報告書　第94集　唐津市教育委員会

中川和哉　1987　「台形石器考」　旧石器考古学　35　旧石器文化談話会

松藤和人　1994　「百花台東遺跡」　同志社大学文学部考古学調査報告　第８冊　同志社大学文学部文化学科

橘　昌信　1998　「長崎県の旧石器文化」　原子・古代の長崎県　通史編　長崎県教育委員会

萩原博文　1995　「平戸の旧石器時代」　平戸市史　自然・考古編　平戸市

萩原博文・加藤有重　1991　「平戸諸島における旧石器文化の緒様相」　九州旧石器　第２号　九州旧石器文化研究会

萩原博文　1997　「ＡＴ降灰前後の石器群」　九州旧石器　第３号　九州旧石器文化研究会

下川達彌・立平進　1981　「日ノ岳遺跡」　長崎県立美術博物館

図　　版

調査風景

調査風景

Ａ１区北壁土層

Ａ５区東壁土層

B１区北壁土層

B１区西壁土層

B２区北壁土層

B２区西壁土層

Ｂ３区北壁土層

Ｂ３区西壁土層

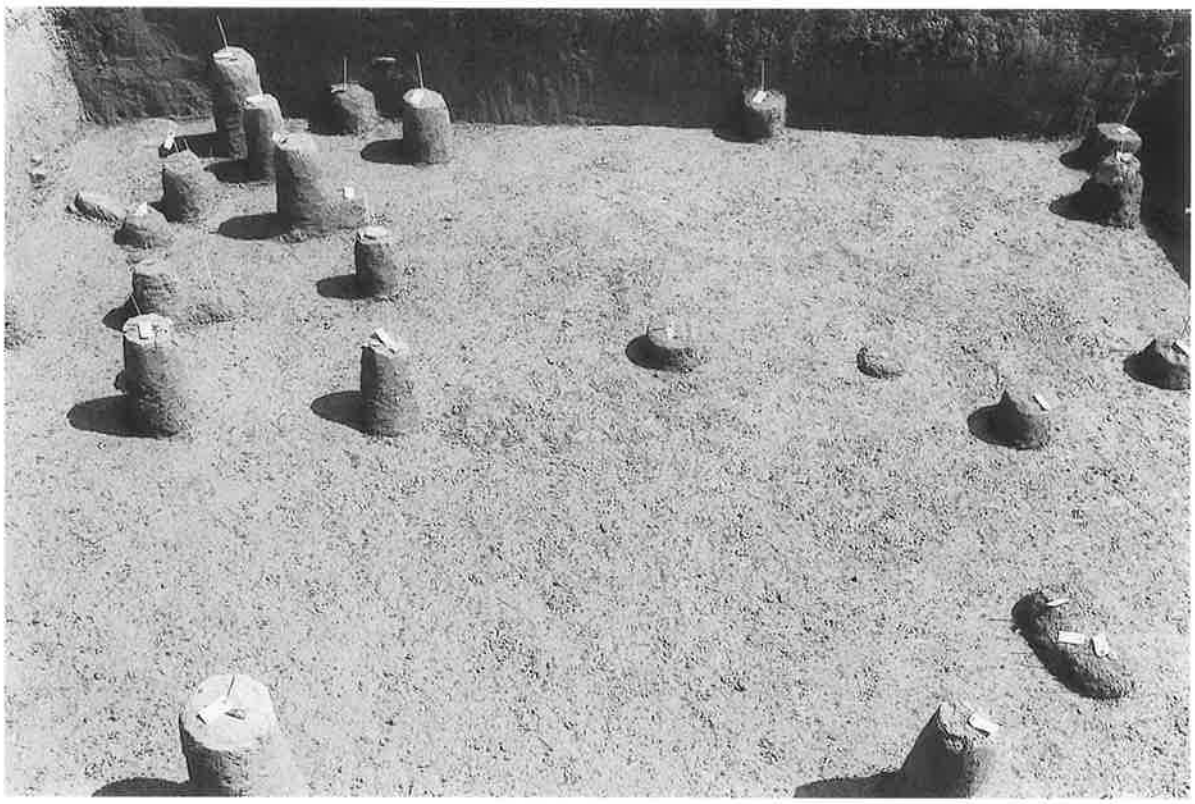
Ｇ１区北壁土層

Ｇ１区東壁土層

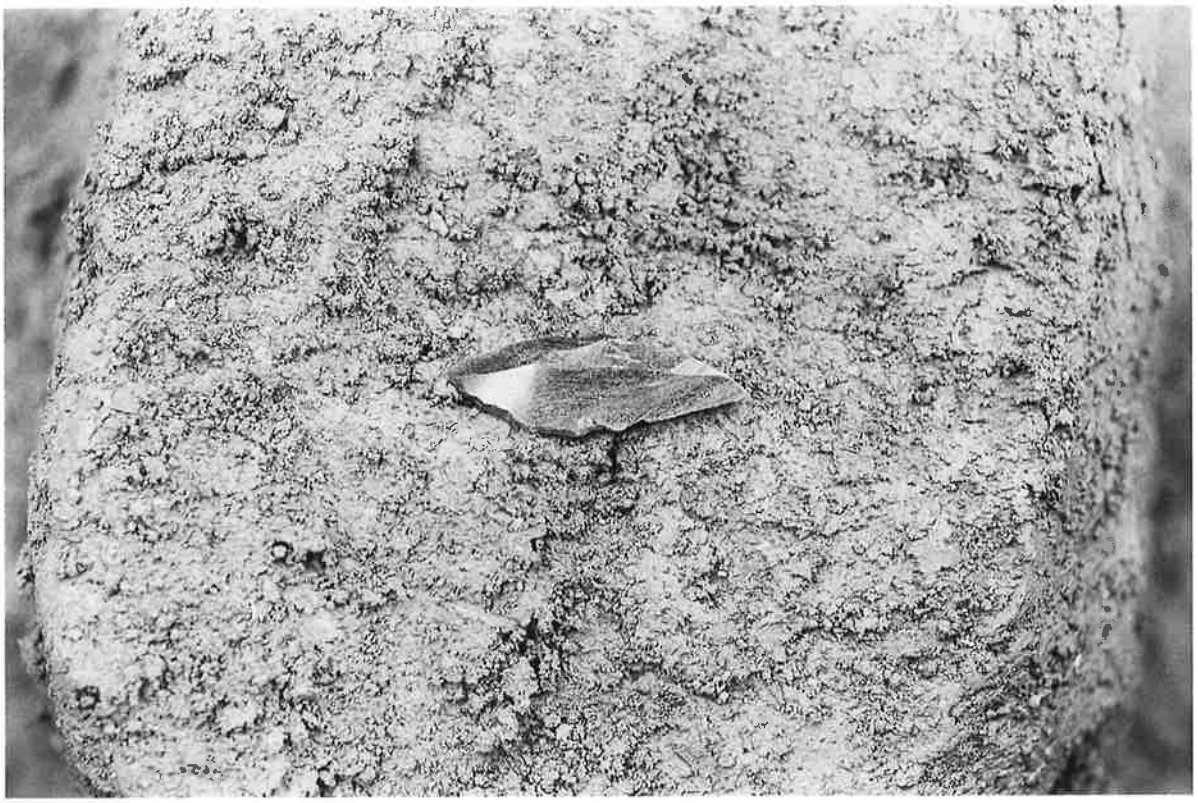
Ｈ１区北壁土層

Ｈ１区東壁土層

集石遺構検出状況（東より）



Ｂ２区遺物出土状況（東より）



G１区遺物出土状況

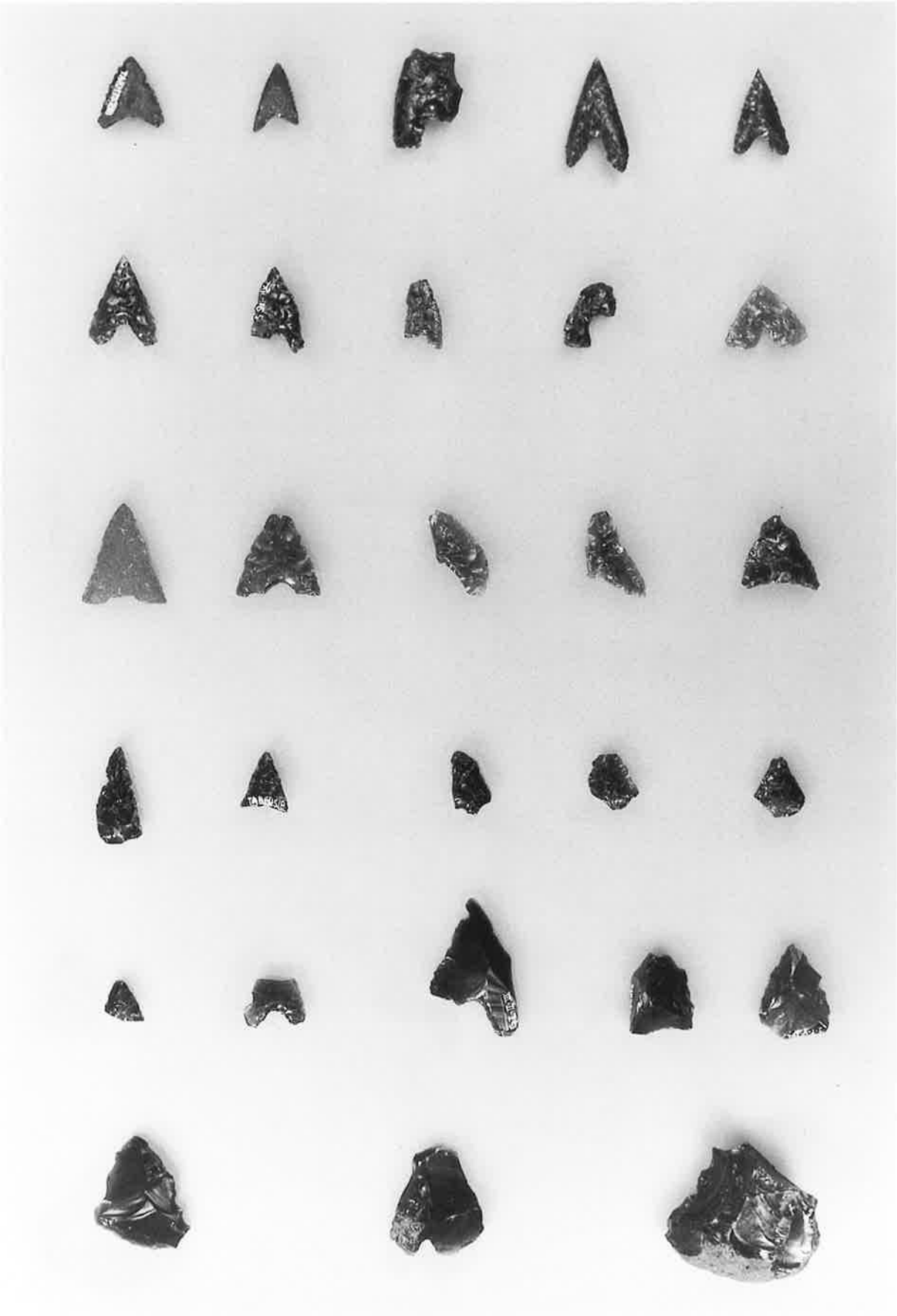
B２区遺物出土状況

Ｂ２区遺物出土状況

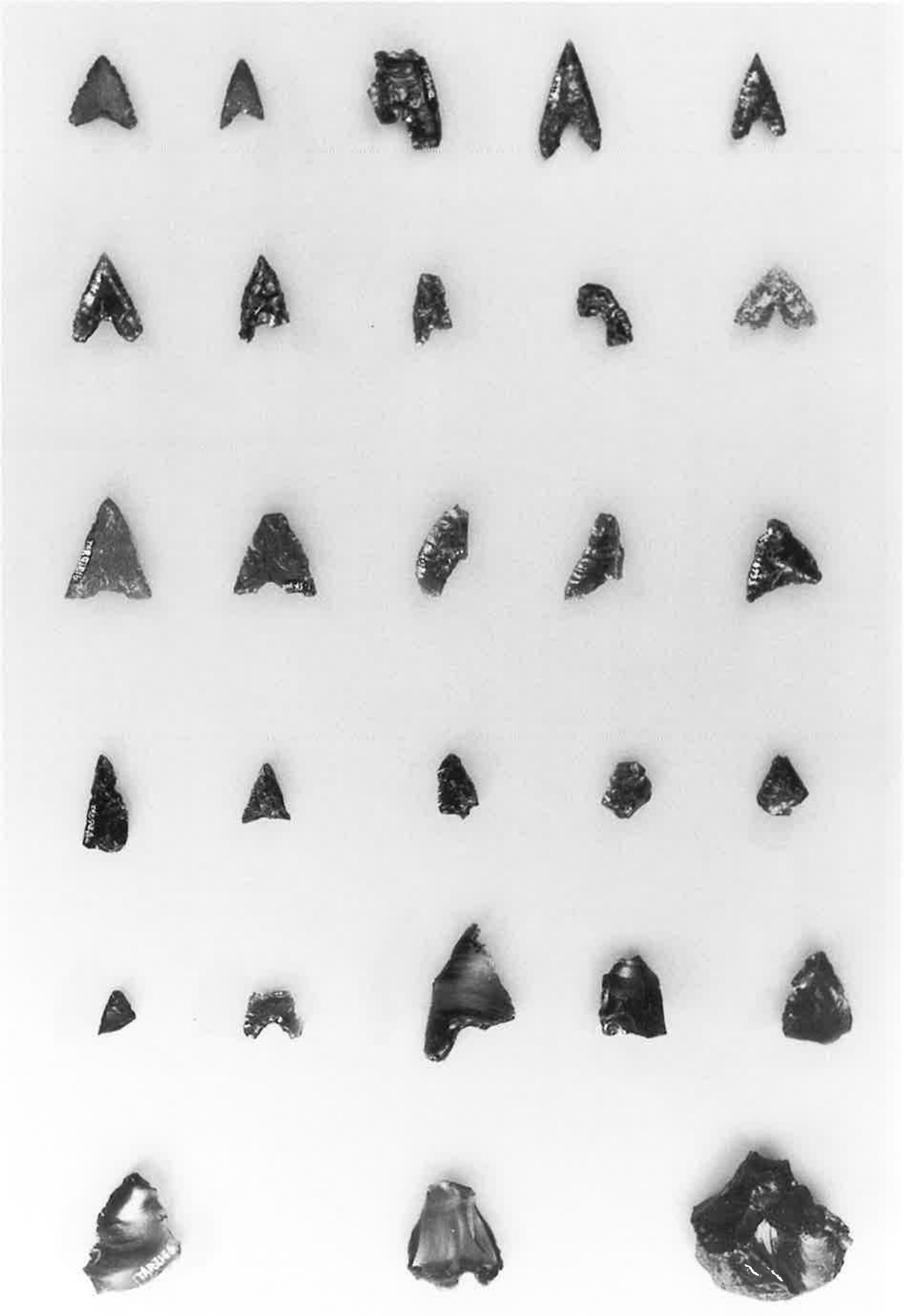
大崎小学校６年生体験学習風景

出土遺物１（表）

出土遺物１（裏）



出土遺物２（表）



出土遺物２（裏）

報告書抄録

ふりがな	たろこうやいせき
書名	田口高野遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	松浦市文化財調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	中田敦之・明石拡子
編集機関	松浦市教育委員会
所在地	〒859－4598　長崎県松浦市志佐町里免365番地　ＴＥＬ0956－72－1111
発行年月日	西暦　2001年３月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たろこうやいせき 田口高野遺跡	ながさきけん 長崎県 まつうらし 松浦市 みくりやちょう 御厨町 にしこばめん 西木場免	42208	58	33°21′30″	129°38′25″	20000301 ～ 20000502	412㎡	国営農地 再編整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田口高野遺跡	遺物包含層	旧石器 縄文	集石遺構	ナイフ形石器 石鏃 近世陶磁器	

松浦市文化財調査報告書 第17集

田口高野遺跡

平成13年３月29日印刷
平成13年３月30日発行

発行　松浦市教育委員会
長崎県松浦市志佐町里免365番地

印刷　株式会社　三　光
佐賀県伊万里市大坪町乙4161-1